

---

# 【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ！】

とある世界の思春期男子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ】

【

### 【小説コード】

N2844Y

### 【作者名】

とある世界の思春期男子

### 【あらすじ】

人生が終わつてようやく消えると思った主人公。しかし彼の思  
いは外れ、第2の人生が憑依という形で始まる羽目に。しかも憑  
依したのは根暗で女難有りな『緋弾のアリア』主人公の遠山キンジ  
だった！ だが彼は自分のやりたいように生きることを決意。果  
たして彼を中心とした世界ではどのような出来事が巻き起こるのか  
？ 物語が、今、始まろうとしていた

## 第1幕 憑依？ 別にいいがチートは嫌だ！（前書き）

この作品は作者の思いつきで描く一次創作です。

不満があれば迷わず退場することをお勧めします。

「別にこれぐらいなら全然大丈夫」という方は進んでください。

ちなみに結構真面目には書きますが、不定期更新ですので予めそのような点は頭の隅に置いておくようお願いします。

## 第1幕 憑依？ 別にいいがチートは嫌だ！

これを見てる奴ら、単刀直入に聞くぞ。人生ってのは一体何だと思つか？

ある奴は幸せになるために神が与えてくれたチャンスだと言った。別の奴は長い道のりの先にあるものを見るための旅みたいなものと言った。

更に別の奴は神が与えた試練や幸せを肌に感じることだと言った。

聞いた後で悪いが、俺はこの三つはどれも正解だと思つし不正解とも思つてる。

多分俺が今言つたことは意味不明だと思つた奴ももちろんいるだろうな。

当たり前だ、俺が言つてんのは滅茶苦茶だつてことぐらい。だがそれが今俺が質問したことの答えだと俺は思つてんだよ。

人生つてのはサイコーに愉快なものもあればクソつまんねえものもある。

愉快に笑えちまえるものがあればシリアスで全然笑えねえこともある。

神を有りがたいとか思い奴がいれば恨むような奴もいる。

人生サイコーとか考える奴もいれば人生サイアクとか思う奴もいる。結局は人それぞれがどう感じるかってことが一番重要なんだろうな。

で、俺の場合は残念ながら後者のクソつまんねえもんだつたて事。どいつもこいつも他人を見下す肩の集まりの中に俺がいた。

んでいつの間にか、俺という存在は消えちまつたってだけの話。別に同情してほしいとか哀れんでほしいから言つてることじゃねえ。

そもそも俺の人生には何の価値もないような空っぽなもんだった。だから別に思い残したことなんざねえし、恨みや悲しみもねえ。そもそも俺は他人どころか自分の親や兄弟も、そして自分自身にも興味関心を示さなかつたようなヤローだ。

もともと空っぽだつた俺の器が今さつき壊れただけってことだ。別に俺はこのまま消えようが苦しみを味わおうがどうでもいい。ただ思いつきり、一度と田舎覚まさねえようにずっと眠つてたいだけ。

だけどそれをさせないとか言つ奴と俺は出会つちまつたんだよなあ  
.....。

これから俺が話すのはすべてまぎれもねえ事実だ。  
嘘だと思うなら忘れる、下らねえ話になるかもしんねえからよ。  
ただこれを見ていろ奴ら.....これだけは絶対に覚えとけ。

人生つてのはな、案外捨てたもんじゃねえかもしねえ。  
これから俺が話すようなことがもしかしたら起こるかもしんねえぜ。

「貴方は.....本当に何も持つていらつしゃらない空っぽな方なのですね」

俺がその良くな訳が分からねえ女と出合った時に真っ先に言われた台詞だつたな。

まあ普通の一般ピープルならここには反論する場面らしい。

誰かが言つてたような気がするがそんな事は知つたこつちやねえ。

それに俺は反論なんかしねえ、女の言つたことが紛れもねえ事実だからだよ。

俺の人生なんぞ聞いても損にしかならねえ肩みたいな一生だ。

この俺自身が言つてんだ、確定事項でもう決まってんだよ。

「んで誰だお前は？ 懐みとかマジでいらねえから。 といつか、良くな俺の面見てそんな顔ができるな。 テメエはお人よしすぎんじゃねえの？ 後悪いけどさつさと俺消してくれないか？ 俺死んだんだろ？ だったら普通は存在自体を消すとか魂を消すとか天国か地獄かにブチ込んだりするもんだろう？ 俺人生とか興味関心一切ねえしいい加減寝たいんだよ」

辺りを見渡しながら俺はの方を見ずに言つてやる。  
今の台詞は俺の残つたすべての感情を込めたもんだ。  
嘘偽りなんざ一切持ち合わせてなんかいねえ。

人生なんか俺にとっちゃ何の意味もなさねえようなガラクタだ。

まあそれは俺自身がガラクタみたいな醜い人形つてだけだろうがな。

「そんなことはありません！」

「いやいやいやいやいや。 何勝手に人の頭ん中覗いてくれちやつ

てんの？」

この女、意外とやり手みたいだがかなり失礼な奴だな。  
人の考へてる事を盗み聞きとかマジであり得ないんだが。  
まあ、別にあの女がニュー　イプツツーんなら別に覗こうが構いや  
しねえ。

だがな……ニュー・タ　イプ以外は断固拒否だ！

「コードイ　ーターだらうがイノ　イターだらうがさせるかあ！

お前らは分かるか！　分からねえよな！　そんなもん俺だつて分か  
らねえよ！

今一瞬自分が何考へてるか分かんなくなつちまつたよ！  
隠すところがおかしい？　なんでそんなこと知つてるかだと？

……そんなもん俺が一番聞きたいわ！　なんかの電波受信しちまつ  
たんだよ！

一瞬脳内にドラゴンスクリューとか訳分かんねえ単語が出ちまつた  
よ！

今俺自身でも自分がおかしくてイタイ野郎だつて気付いたよ！  
なんなんだよ俺！　さつさと消えろよ俺！　後スティーブン・セガ  
——ル！

「……で、お前一体誰なんだよ？」

「こきなり振つてきましたよねー？ なんなんですかそれはー？」

「つるせえー わざと俺みたいな屑を消してくれつて言つてんだよー！」

「聞いてませんし待つてくださいー！ 一回落ち着きましょうー！」

「マヨネーズと醤油を合成した物を口にねじ込んでやるあああああー！」

「だから落ち着きなさいって言つてるでしょー！」

女が思い切り俺の脳天をチョップなんかしやがつた。  
何なんだこの女は。 マジで失礼な奴だな。

さすがの俺でも初対面の奴にチョップなんかまさねえぞ。

ま、初対面の奴に火をつけたことはあるんだがな。  
あれは綺麗だつたなあ。 俺が人生で初めて感動した瞬間だつた：  
… ような気がしたぜ。

一応付け加えると過去形、今は何とも思つていねえぞ。

ちなみにもう一回チョップされて血がぴゅーぴゅー出でる（現在形）  
。

痛いからもうバカはかまさないよつて……いや別にいいが。

「これなくなつたら俺マジでゴキブリ以下になるし。

……いや。元からゴキブリと結構張つてた人生歩んだな、俺は。

「まあいいや。 それでお前は誰なんだ？」

いきなり話を振つてやる俺。

その様子を見て女は何やら頭を押さえている。

頭痛か？ 大変だなwww

「笑わないでください！ ……後、私は最上級神のアテムです」

「へへ……最上級神ねえ。 んで、なんで俺みたいな奴の所に？」

「むしろ貴方だから私が来たのです」

俺だから？ どういうことだ？

俺は別に特別じゃなけりやあ普通でもない、劣等な人間だぜ？  
魔法 高校の劣 なら間違いなくウイー・的・ポジションだぞ？  
完全なる雑魚キャラよりも雑魚キャラなんだぞ、俺は。  
なんでそんな奴のところにくる必要があるんだ？

……あ、多分分かっただわ。 この女が俺の所に来た理由。

「からかいに来たのか？ 大変な悪趣味を持っている最上級神だな」

「違います！ 私は貴方に第一の人生を『える』ために来たんです！」

第一の人生だと？ 何言つてんだよこの最上級神様は。

俺は一度生きていた世界で死んだ人間、つまり死人だぞ。

いくら最上級神だからってそんなもんが通るはずねえだろうが。

寝言は寝ていいやがれってんだ。

「つーか、なんでそこまで俺にこだわるんだよ？ 俺はゴミ屑みたいな人生を今まで歩んできたんだぜ。んでやつと死んで終わりなのにまた惨めな人生やり直せってか？ もしそうだったら、神だろうがなんだろうが殺しにかかるぞ？」

「だ、か、ら、違います！ 第一の人生は漫画かアニメ、もしくは小説の世界に行つてもらつんです！ 勝手に勘違いしないでください！」

「はあつ！？ んなもん出来るわけねえだらつが！」

「だからそれが出来るんです！ まずは話を聞いてください！」

「チ！ このままじゃ八方塞がりつてやつか。仕方ねえから話を聞いてやるとするか。てか俺の態度つてでかいよな？ 相手は神なのに。」

まあ気にしなけりゃあ大丈夫つてやつか。  
俺敬語使うのとかマジで面倒で嫌だつたし。

「いいですか？ 貴方の人生は、正直言つて空っぽです」

「ああ、自分でもそう思つ。『キブリでももうちょっとマシだな

「……それですね。さすがに貴方をこのまま魂を消してしまう訳にはいかないと神の会議で先ほど決まったところなんです。だから貴方には第二の人生を送つてもらいますよ」

「今思つたんだけども、なんでそんなことすんの？」

「え？ な、なんでつて」

「俺みたいな生きることに何の執着心も持たない駄目男より、現実世界で苦しんでいる奴を何とかしてやつたりは出来ないのか？ そつちの方がよっぽど有意義だと俺は自分で自負しているし、俺が地獄に行くことで世界中の腹減つてるジャリ達の腹が膨れるなら俺はいつだつて行くぞ」

「そう！ それです！ そこですよー！」

「えー？ ビーー！ 何！ 何か起こつたのー？」

辺りを急いで見渡すが何も起こっていない。

本当にこの最上級神様はおかしな奴だ。  
なにが「そう！ それです！ そこですよー！」だ。  
俺のことをおちょくつてんのか？

「別に何も起こつてねえじゃねえか」

「……やはりとは思いましたが貴方は鈍感なのですね」

「人の好意ぐらい気付くわ！ 死ぬ前はそんなこと記憶があつた時は無かつたがな！」

「威張ることではありますんよ。……私が貴方に、第一の人生を送つてもらいたいと思ったのは貴方のその心の優しさに感動したからです」

「はあああああつー？ 僕が優しいだつて！？」

あり得ない、こいつの言つてることは嘘つぱちだ。

大体俺は他人はおろか自分さえを拒絶するぐらいの奴だつたんだぜ。そんな奴が優しさなんか持つてゐわけねえだろ。

大体そんな冗談誰が信じるつていうんだ。

知らんわ、そんな頭のおかしい奴を俺は知らん。

「では貴方はさつき私が第一の人生を送つてほしいと言つた時に何と言いましたか？」

「……あれ？ 僕、なんであんな俺らしくない事言つたんだ？」

自分でも全く分からない。

いつもの俺なら無視するか、拒絶するかだつたのに。いよいよ俺の脳みそも腐つてきた証拠なのか？

「貴方は心の奥に優しさを持つてゐるんです。でも、長い間人と関係をほとんど絶つていた貴方はその優しさには気付けなかつた。そんなに優しいのに、あんな割に合わない人生はさすがに黙つて見過ごせません」

「同情するより金をくれ！……といいたいが今は意味ないな」

「折角人が言つてゐるのに茶化さないでください」

「……分かつたよ。そのアニメか漫画か小説かは知らないが、取り合えず一次元の世界に行つて第一の人生始めりやいいんだろ？ 行つてやるよ。どうせ断つても無理やり飛ばすんだろ？」

「よく分かりましたね。 大正解ですよ」

いや、別に正解しても全く嬉しくなんかないんだけど。  
後そのドヤ顔みたいなのは今すぐ止めてくれ。  
むかつくな要素しか入ってないから。 殴りそつだから。

「んで、どこの世界に行きやあいいんだ?」

「それはあなた自身が決めてください。 私が決めるのではあります  
せん」

「…………あのなあ…………お前は俺の生前の人生知ってるんだろ? だつ  
たら俺がそんな本を読まなかつたことぐらい知つてんだろうが。  
アニメも見てないし漫画や小説も読まない。 やつてたのは筋トレ  
とか勉強だけだぞ」

「だから話は最後まで聞く! ……いいですか? まず、この資料  
の中から好きな世界に行つてもらうので、目を通してください」

そう言って資料を手渡される。

えつと……そこにあつた一次元の世界は……

『機動戦士ガンダムSEED』 『IIS【インフィニットストラト  
ス】』

『生徒会の一存』 『とある魔術の禁書目録』 『緋弾のアリア』  
『機動戦士ガンダムW』 『これはゾンビですか?』

……良く分からぬ上に突つ込みたい部分がいくつかあるな。

その代わりかは知らないが大まかな説明が色々と書いてくれてはい

る。

まあいいや。 それに免じてこの際軽く流しておいておいた。  
しかし迷ってしまうな。 うーん…………おー！  
この世界とかいいかもしないな。

「決まりましたか？」

「それじゃあこの『緋弾のアリア』について世界にしてくれ」

「ちなみに理由を聞いてもいいですか？」

「（）いつガンアクションを一度やつてみたいと思ったんだ（八歳の時）」

「男の子なんですね」

ええい！ そんな微笑ましそうな表情でこっちを見るな！  
いいだろ別に！ 男だったらそういうのに一度は憧れるんだよ！  
ちなみに俺が憧れたのは八歳の時だがな！

「それでは次に憑依する人物を決めてください」

「憑依？ そこは転生とかじゃないのか？」

「貴方の場合だと元の世界と同じ人生を歩む可能性が出てしまいます」

ああ、なるほど。 納得したわ。

つまりその世界の登場人物ならある程度ブレても修正が効くと。  
本当にありがたい限りですね。 全くそうは思いませんがっ！

「……それじゃあこの遠山キンジって男で」

「???? 普通は不知火亮とかじゃないんですか？」

「こんな扱いあり得ない。 なんで悪くもないのにコイツは責められまくってんだ？ だつたらいつそ俺が自由気ままにやってそれなりの評価にする」

「なんか地味に優しさが混じっているので複雑です」

さつきからうるさいぞ最上級神。

人がそう決めたんだから別にいいだろ。

「それじゃあ最後に特典を決めてください」

「特典？ なんでそんな物がいるんだ？」

「なんでも他の神様達が人をたびたび死なせてしまつことがあるんです」

「うわ、なんて迷惑な奴らなんだ。

他人の人生間違っちゃつたで奪うなよ。

俺みたいな人生に意味を見出していく奴はともかく。

「その時にお詫びとして転生か憑依+特典といった形で別の世界に送るみたいです。 今回は例外なのですが送るなら同じように特典を付けると」

「じゃあまずは……このヒステリア・サヴァン・シンドローム……

えーと、ヒステリアモードだっけ？ これを自分が出したい時に出せるようにして、女に優しくなるっていう特性は消してくれ

「こちなり微妙ですね。 ちなみに後特典を使えるのは一回ですよ」

合計で二回も使えるのか？

さすがにそれはサービスしすぎとか思わないか？

下手すりゃ全部チートみたいな能力選ぶ奴が出てくるが。

俺はチートみたいなのはあんまり欲しくはないな。  
そりゃある程度強くはしてほしいが最強は嫌だ。

全く面白みがない。 イコール行く意味が無くなってしまつ。

「じゃあ二回はなんか超偵みみたいな能力くれ

「こや。あの……具体例は？」

「ないから困つてんだろー。 なにか付けてくれー。」

「うーん…… それじゃあドラゴンスレイヤーの炎の滅竜魔法でいいですか？」

「チートじゃないんだろうなー。 チートだったら却下だー。」

「自分の皿で確かめてくださいー。」

と言わされて何かの漫画を投げ渡される俺。

さつそく読んで行くと……あつたあつた。

……おおー。 やんとチートじゃない能力だ！

かよつと強こよくな気がするけど別にいいやー！

「じゃあそれでいい。で、三つ目だが……」

「三つ目は？」

「上手い作戦を立てられるような頭脳をくれ。こざとこいつのた  
めだ」

「はいはい。……貴方みたいにチートじゃない能力ばかりを選ぶ  
人って案外少ないんですよ。本当にいいんですか？」

「チートは嫌だ。面白くなくなる」

「そうですか。 それでは、行つてらっしゃい

そう言われて急に意識が遠くなる。

ああ……最後ぐらいちゃんと礼でも言つとくか。

「あんがとよ……楽しんでくるぜ」

そこまで言つて俺の意識は完全に途絶えた。

最後に最上級神……いや、アテムが笑つたのは気のせいいか?

まあ何はともあれ俺は再び生きることになる。  
そしてその世界で起きる出来事を俺はまだ知らなかつた。



## 第2幕 嵐の前の一時 だが俺は気付かない！（前書き）

今回から原作スタートです。

気長に見守ってくださいよつと願いします。

## 第2幕 嵐の前の一時 だが俺は気付かない！

急に空から小学生みたいなペチャパイ女が降ってくると思つか？

昨日見た映画とかアニメだつたら降つてきていた。

ただしグラマラスな体型の女ばっかりだつたような気がするが。まあ確かにアニメとか漫画のよつたなフィクションの世界だつたらあり得るかもな。

【注意！ この作品はフィクションな上に小説の世界です】

だがそれは絶対に何かしらの不思議現象が起ころる前触れ。もつと良い場合では主人公になれる切符なのかもしれない。だから一回でもいいから女の子が降つてきてほしい！

……とか馬鹿な事考えていた奴や未だに考えている奴。さつさとその甘つたるい考えを治すか、精神科に行ってその浅はかな精神を叩きなおしてもらうか、記憶を消失することをお勧めするぞ。

別に消失じゃなくて喪失でも大して変わらないから だ。  
別にテストには出ないからマーカーとか引こうとするなよ。

まあ結局何が言いたいかつて言つたら、そんな考えは浅はかなものだつてことだ。

異議があるなら自分の脳みそフル回転させて考えてみればいい。回転しすぎて変化球とか投げない様注意はしろ！

フォークはすっぽ抜けたらキャッチャーが取れない場合があるから

な！

すまん、今は自重することにしよう。

急に女の子が空から降つてくる。

それは常識的に考えると、絶対にあり得ない話だ。

別の方 hướngで考えると厄介な事に巻き込まれるかもしだれ。それはいきなり日常が非常事態になるのと同じことだ。

もちろんそれでいいという奴は少なからずといふ。  
フィクションならそれでいい。

だが俺達が生きているこの世界はノンフィクションなのだ。

【注意！ 何度も言いますがこの世界は一次創作でフィクションな上、語っている彼には主人公補正が付いています。彼がすることは真似しないようにしましょう】

現実でそれが起つた場合は迷わず無視して逃げる。  
そんな女の子がまともなはずがない。

必ず危険で面倒なことに巻き込まれて人生が終わってしまう。

だから俺、遠山キンジは空から女の子が降つてきてほしくはない。  
むしろ空から女の子なんて降つてくるなと思う。

この狂った高校には別に不満はない。

だから……だからせめて……面倒事に巻き込まないでくれ！

だが俺の人生は……そんな簡単には出来てないんだよな。  
なあ神様、これは一種の試練でやつなんだろ？

じゃあ俺は……その試練をブチ壊す！（とある魔術の禁書目録風に）

あ、（とある魔術の禁書目録）の部分を伏字にするの、完全に忘れちまつた……まあ、なるようになるから、別にいいか。

……ピン、ポーン……

慎ましいチャイムと共に、俺の意識はマッハで覚醒する。マッハとは言つてもそんな速さではないぞ。

あくまで表現の内の一つでコーモアなものを選んだだけだ。バッハと勘違いした奴はまだ起きて間もないからだろうな。

ちなみにだが俺こと遠山キンジは元の人物に憑依している。だが肝心なのはこれからで憑依してるのはポイントじゃない。

憑依した日がな……原作開始曜日の前日ついでにいつことだ、コラ。

そりや今まで接してきた奴の名前とかそれまでの記憶をくれたのは嬉しい。

身体能力も元の世界の俺と同じだったことを含めてもだ。だが神よ……せめて三年前とかからどうにかならなかつたのかね？

ちょっと怒つてたからムスカ大佐風の口調になつたじゃないか。

別に相手に三分の猶予なんか『えないのでね。  
後あんなダサい眼鏡は掛けないけどな！

まあそれはとりあえず置いておくとして、枕元の携帯を見る。  
現在時刻は朝の7時ちょうど。

少なくとも後三十分は眠れる時間だぞ、これは。

「（誰だよ。 こんな朝早くから……無礼な奴め）」

居留守を使つてやるとこう手もあることはある。  
だがこのチャイムの慎ましさにはイヤな予感がする。  
一応服は着ているためそのままドアの方へ歩む。

ドアの覗き穴から外を見る。  
すると やはり。

「（……やうにやキンジはこの女子に毎朝来てもらつてたっけ）」

そこには 白雪が立つていた。

純白のブラウスに臙脂色の……何か忘れたものとスカート。  
シミ一つ無く武僧高のセーラー服を着て、漆塗りのコンパクトを片手に、どこにでもする必要があるのか分からないがせつせと前髪を直している。

この少女、白雪は遠山キンジ（憑依前）に恋心を抱いている。  
ちなみに幼馴染つていうよく有りがちな設定。

朝から幼馴染に起こしてもらつて一体いつのギャルゲーだよ。  
一部の男達に取つたらまたつたものではないのは確かだろ？  
まあ俺がキンジになつたからにはそれは実らないだろ？。

俺は鈍感ではないがあまり女子に興味はないかい。

おつとセシの諸君、俺はB-1でもないからセシは注意しないよ。

とまあ現実逃避はこのぐらいいにしておくか。

このままだつたら永遠と深呼吸してるかもしれないし。いつこう部分は本当に訳が分からぬヤツだと想つ。ガチャ。

「……何やつてんだよ田舎！」

「キンちゃん！」

誰がキンちゃんだ！ 俺の名前は遠山キンジ。せめて遠山君とかキンジ君とかで呼んではくれないか？ されるとこいつ……なんかむず痒くなる。

あのそのばあつとなつた顔も止めろ。

なんか変な電波受信しそうで怖いんだ。

その内俺の田で地上デジタル放送が映し出されても知らんぞ。

「頼むからキンちゃんは止める。こつちは恥ずかしいんだからな

「あつ……」「あ、「めんね。 でも私……キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんを見たらいつこ、あつ、私またキンちゃんつて……」「めんね、「めんねキンちゃん、あつ

「すまないな。 期待した俺の脳みそが馬鹿だつた

「うう」は男子寮の中に入れてやることにした。  
ずっと外にいてもいうのもなんだか気が引ける。

それに「う」は男子寮、女子は普通は来ない。  
それも取り合「う」言っておく必要があるな。

「う」は男子寮だ。あまり軽々しく来るなよ

「あ、あの。でも私、昨日まで伊勢神宮に合宿で行つて……キ  
ンちゃんのお世話、なんにもできなかつたから」

「しなくてもいい。俺は近所のクソジヤリか

「……で、でも……すん……ぐす」

「頼むから泣かないでくれ。悪くないのに罪悪感がわく」

あえなくノックアウトされる情けない俺。

仕方ないだろ、こんな状況になつたのは初めてなんだから。  
いや、遠山キンジ自身は今までに何度も経験したはずだ。  
だが俺は遠山キンジではない。

つまり俺はまだ経験していないんだよ。

分かるか？ 分かれ！ 嫌でも分かつてくれ！

「それで、今日は何をしに来たんだよ？」

「う、これ

俺はキッチンと座るのが面倒だつたため座卓の脇に座る。  
白雪は正義正しく正座すると、持つていた和布の包みを解いた。  
そして出てきた漆塗りの重箱を俺の前に差し出すと、蒔絵つきのフ

夕を開ける。

そこにあつたのは……色とりどりの朝食だつた。

ふんわり柔らかそうな玉子焼きから始まり、ちゃんと向きを揃えて並べたエビの甘辛煮、銀鮭、西条柿といった高級食材や白く光るこはんが並んでいた。

「ごめん、憑依する前の遠山キンジよ。

お前はかなりのリア充だな。

俺の目から見てもお前はあまりにも女に恵まれ過ぎていいが。今なら武藤達の言いたいこともハツキリ分かつたぜ。

「ねざねざ作るの大変じやなかつたかのか？」「こんな豪華な料理」

「う、ううん、ちょっと早起きしただけ。それにキンちゃん、春休みの間またコンビニのお弁当ばかり食べてるんじゃないかな……って思つたら、心配になつちやつて……」

「…………すまない。お前に心配かけちまつてたんだな」

そう。

実際に遠山キンジは春休み中にコンビニ弁当ばかり食べていた。料理すらまともにできないのかと、俺ですら思つた。最近は男も料理はできるほうがいいんだ。

こんな好意は無駄には出来ない俺は有り難くいただく事に決定。ちなみにこの作ってくれた料理、滅茶苦茶うまい。

俺がそうやって食べている間、白雪は正座したまま頬を桜色に染め

「うつむき、更にはミカンをむきはじめてる。  
どうやらそれすらも俺にくれるらしい。

さすがに礼の一つも言わなければ無礼だらう。

俺はミカンを口の中に頬張りながら白雪に向を直る。

「す、く美味かつた。いつもいつもありがとうございます」

「えつ。あ、キンちゃんもありがとう……あつがとうござります」  
「なぜ俺がありがとうと言われるんだ。あと三つ指はつかなくて  
もいい。というかつかないでくれよ。土下座してこようつに見  
えて仕方ない」

「だ、だつて、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言つてくれたか  
ら……」

たつたそれだけで人は感謝をするものなのか?  
俺、今初めて知つたぞ。

でもそれ本當かどうかはかなり微妙そつだなあ。

今度不知火にでも聞いてみるとしよう。武藤は無理、多分笑うか  
ら。

「やつこつもののが……まあいいか。『ちやつせぬ』

俺は綺麗に入れ物を片付けて白雪に差し出す。

俺がそれをしていた間に白雪は取つてきた物を手渡してくれた。

それはソファーにさつき俺が放つていた武藤の学ラン。

正直あまり着たくない、ダサいから。

「キンちゃん。今日から一緒に2年生だね。はい、防弾制服」

俺は仕方なく学ランを綺麗に着る。

すると今度は食卓テーブルの上に置いてあつた拳銃も持つてきた。

「つしてみると、白雪はお母さんとかむいてそうだな。

職業としては保育園か幼稚園の先生とかも危なげなくこなしそうだ。

「……別に今日ぐりいは銃は持たなくていいんじゃないのか」

「ダメだよキンちゃん。 校則なんだから」

「白雪よ、校則つてのはな。 破るために出来てるよつなもんだ  
よー。」

「キンちゃん。 嘘はダメだよ」

と、白雪は両膝をついて「うちのベルトにホルスター」と帶銃させてしまつ。

校則……『武徳高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づけ  
る』、か。

お前らの予想通り、この武徳高は普通じやない。

普通の高校なら、こんな校則はあり得ないもんや。

「それに、また『武徳殺し』みたいのが出るかもしれないし……」

「『武徳殺し』？ 白雪、なんだそれ」

「ほら、あの、年明けに周知メールに出てた連續殺人事件のこと」

ああ……確かそんなのもいたな。

たしか武徳の車やなんかに爆弾を仕掛けた拳銃、短機

関銃のついたラジコンヘリで追い回して海に突き落とす。多分、そんな手口を使っていたヤツだっけか。

「だがあれは逮捕されたはず。まさか脱獄したのか?」

「し、してないけど……で、でも、模倣犯とかが出るかもしれないし。今朝の占いで、キンちゃん、女難の相が出てたし。キンちゃんの身に何かあつたら、私……私……ぐぐ……」

うへえ……朝から嫌なことばっかり言つなよ。

それじやあ遠まわしに俺が襲われるって言つてるようなもんじゃねえか。

だが……もしそうなつた時は武器が必要だな。  
仕方がない。とりあえず持つて行つておくとしますかねえ。

「分かつた。ちゃんとバタフライ・ナイフも拳銃も持つていく。  
だからもう泣きやんでくれ。お前の泣き顔なんか俺は見たくな  
い」

そう言いつつ俺はバタフライ・ナイフを棚から出してポケットに收める。

これはキンジの兄の形見。無くすわけにはいかない。

白雪はなぜか俺をうつとつ眺め、ほっぺたに両手をあてていた。

「???.? どうしたんだ白雪。熱でもあるのか

「…………キンちゃん。かつここい。やつぱり先祖代々の『正義の味方』って感じだよ。ああ、キンちゃん本当に素敵」

「やめてくれ。正義の味方なんて肩書、俺には必要ない」

俺は白雪の手に持つている黒い名札を貰つてつける。

武偵高では4月には生徒全員が名札を付けるルールがある。

そんな部分までこまめに守るとは、さすがは生徒会長で園芸部長で手芸部長で女子バー部長で偏差値75の超人的しつかり者だな。憧れる生徒もさぞかし多いことだろう。

「すまないが俺はメールをチェックしてから出る。先に行つてくれ」

「あ、じゃあ、その間にお洗濯とかお皿洗いとか

「それじゃあお前が遅くなる。生徒会長なんだ、もう少し自覚を持て。そんな事をして遅れでもしたらお前自身の評価が下がるんだ。それに他の生徒にも示しが付かない。俺みたいな問題児のことは放つておけよ。必ず行くから」

「……は、はい。じゃあ……その。後でメールとか……くれる」と嬉しいです

「分かった。なるべく早くするよう心がける

そう言つと納得してくれたのか、白雪は部屋を出でていく。悪い子じゃないんだがちょっと礼儀正しそぎるな。

そう考えながら俺はPCの前に座つてメールやWebを見る。

そしたらいつの間にか7時55分になつてしまつていた。しまつたな、これは58分のバスに乗り遅れたぞ。まあ別にいいか。チャリなら十分に間に合つだろ？。

生涯。

生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろつ。  
なぜならこの後に空からペチャパイ女が降つてしまつたんだから。

神崎・H・アリアといつ、厄介な女がな。



### 第3幕 嵐つていつの間にか来るんだよな……ていうか死ぬからっ！

急にセグウェイなんて意味不明な物に命を狙われると思つか？

よつ、おはようかこんばんわだ諸君。 今更なんだが俺だ俺だの前田の俺だ。

遠山家に生まれてから17年ぐらい、遠山家次男の遠山キンジくんだお。

取り合えず一番上以外の意味不明な紹介文は謝つておひつ。 ん？ 一番上の文章の意味は何なのかつて？

まあ待ちたまえよ。 何事も待つのが肝心だ。

かの有名な偉人、織田信長公や豊臣秀吉公は言いました。

『人間、待つことはとても大切。 待つことは動くことよりも困難だ』と。

はいすみません、冗談です大ウソです出鱈田です。

だからそんなに怒らないで。

パソコンの電源今すぐシャットダウンしてやるとは言わないで。

この小説の評価点下げてやるとは言わないでええええええええええ！

【謝罪：憑依した遠山キンジ君が大変メタな発言をしました事を、心よりお詫び申し上げます。 反省はしますが後悔はしません。 本当にすいませんでした。 これからもこのような事があると思いまが、そこは広い心で見守っていただきたいです。 重はなるべくしません。 それがこの小説の売り（？）なので b y 駄作

者】

まあ、本題に入るとしようつか。

うん、『お前が脱線の原因だら』とか言ひ感想は一切受け付けておりません。

ここのは穢便に済ませて下さー。 そろそろ真面目にしますから。

えー……今回なぜ俺の迷言から始まつたと言いますとね。

現在の俺の状況があの言葉に当てはまるんですよ。

いやー……やっぱ信じてくれませんよね、こんな説明じや。

でもマジなんですよ実際は。

今この瞬間も俺死ぬ可能性大ですからね。

どこのくらいが例えるならエボラウイルスに感染した時くらいの致死率。

ちなみにエボラウイルスは感染したら90%の確率で死ぬぞ。

氣を付けろよ。 あればマジで怖いんだから。

あ、また脱線したな。

とこつわけで今の俺の状況を少しだけお見せしよう。

じっくり見なくても音声で大体分かるか。

はーじやあよーいスタート。

「ああああああああ！ 死ぬつてマジで！ マジで死ぬから止めてー。」

「だつたら せつと 死にやがれ であります」

「嘘だろおおおおお！ なんで俺が武僧殺しに狙われなきゃならん

のだあああ！」

「煩いで やんす  
さつさと死んで 地獄か天国に  
いくでやんす」

「語尾が明らかにおかしくなつてゐううううううううううううー」

「発射準備完了。直ちに標的を撃ち殺してやるでやんす」

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ

サブマシンガンを俺に向かつて連射した時の発砲音

その時発せられた俺の情けない絶叫の声（涙も出ている）

うん、さすがに君達も分かってくれたかな？

リバルに俺の命が危なくなつてゐること分かったよね。今この瞬間にも燃え尽きるかもしれない俺の命のことを。

何気に平常心みたいだけどそれは心だけだよ。

いや、心も平然を裝つてゐるだけでかなり動搖してゐるよ、  
もつと正直泣きそつだよ～～ていうか泣いてるよ～～。

ていうかそもそもなんでこんなことになつたか説明しておく必要があるな。

あれは俺が寮を出てチャリで登校している時のことだ。

そこで……そこであんな事があつたがために今の俺がいる。  
どうやらいつの世界でも俺はあんまり運が無いみたいだ。

後さ……未だにサブマシンガン撃たれまくつてんですけどおおおお  
おおおお！

助けてくれ——！ 誰でもいいから、暇があつても無くても助け  
てええええ！

俺マジで死ぬからアアアアアアアア！ イヤアアアアアアアアアアアア！

【時刻8時 現在自宅からチャリで出たところ】

雨が降つたら、その雨を全身くまなく浴びて楽しめたのって確かアルチュール・ランボーだつたか？  
いや……なんかちょっと違うような気がしなくもない。  
俺の記憶力に多少のミスがあつたんだな、きっと。

負け惜しみもそこまでいけば笑うしかないな。

まあその通りだつたら今の俺は笑われている訳だが。

「遅れるかもな……まあ元々問題児だし大丈夫かな

パソコンをしていてバスに乗り遅れたおバカな俺。

仕方なくランボーの言葉に習つてチャリで風景を楽しみながらの登

校。

じゃあないだろ、行かなきや遅刻なんだから。

取り合えず暇だから軽く説明でもしておこうか。

俺が今から向かう東京武偵高の実態を少しだけな。

### 【東京武偵高に関係することについてのりょうとした説明】

- ・東京武偵高はレインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形の形をしている人工浮島の上に建っている。
- ・学園島とあだ名されたこの人工浮島は、『武偵』を育成する総合教育機関。
- ・武偵とは凶悪化する犯罪に対抗して新設された国家資格で、武偵免許を持つ者は武装を許可され逮捕権を有するなど、警察と同じような活動が可能。
- ・ただし警察とは違い、武偵は金で動く。金さえもりえるならば、武偵法の許す範囲内ならどんな荒っぽい仕事や下らない仕事でもこなす。
- ・一言で言い表すとすれば『便利屋』という表現が一番正しい。
- ・また東京武偵高では、通常の一般科目に加えて、その名の通り武偵の活動に関わる専門科目を履修することができる。

取り合えず今回はじめてにしておこう。

また時間があればもっと別の事も説明する。

俺は体育館へ向けてチャリをターンさせる。

良かつた、なんとか始業式には出られる時間帯だ。

ショッパながら遅刻なんてしゃれにも話にもならないからな。

「その チャリには 爆弾が 仕掛け ありやがります」

「え? 何て言った? チャーリーとチヨコレート工場がなんだつて?」

「その チャリには 爆弾が 仕掛けたって 言つたんで ありますやがります」

「これってさ、あれだろ。

だだの……いたずらだとかの類のものだよな?

俺に向かつて言つてないよな? 通行人とか他にもいるよな?

「チャリを 降りやがつたり 減速させたら 爆発 しゃがります」

しかもこの声、今ネットで人気急上昇中のボーカロイド。  
あれで作った声なんだろ。

そんな分析をしてから、印象に残る一部分を脳内で再生。

爆弾が爆発する……だと?

一体何の冗談だよ。何時代の嫌がらせだよ。

眉を寄せて周囲を見回すと、俺の自転車にはいつの間にやら妙な物体が併走してきましたよ。ちよつとやけいのお兄さん、信じじられますこの状況。

しかもその併走してきた物体が物体なだけに思い切り引く。

車輪を平行に並べただけで器用に走る、タイヤつきのカカシみたいな乗り物。

こいつはいつかのテレビに出てたやつだ。

『セグウェイ』とかいう乗り物だつたはず。

「助けを 求めては いけません。 使つたら 爆発 しゃがります」

「……しかもサブマシンガン付きとは豪華だなあおい」

セグウェイは無人だつたが、人が立つて乗るべき部分には結構小さめなスピーカーと リニアと呼ばれるサブマシンガンが一丁設置されていた。

ちなみにリニアとは、秒間に10発の9ミリパラベラム弾をぶつ放しやがる、イスラエル社の傑作短機関銃だ。最悪だ、完全にこれは武偵殺しの模倣犯だぞ。

混乱しながらもチャリを急いで調べると あつたよ。  
サドルの裏にいつの間にか変な物体が仕込まれてるよ。  
落ち着けと心の中で念じながら指で変な物体をなぞつてみる。

ますます最悪だ。 型までは分からんがプラスチック爆弾みたいだ。

それもこの大きさ。

自転車どこのか自動車でも跡形もなく消し飛ばせるぞ。

しかも今回のは世にも珍しいチャリジャック。  
全然頭の中になんか入つてなかつたぜ。

自分のチャリに爆弾が仕掛けられるかもしれないなんて思いがなあ。

「ていうかさあ……なんで俺なんだよおおおおー！」

この直後、俺とセグウェイの鬼「」が幕を開けた。決して面白くもなんともない。

命の危険しかないからセイントには注意してくれよ。

【現在進行形 時刻8時5分】

まさかセグウェイがあんなに速いとは知らなかつた。いや、知らなくても無理ないか。

誰がこんな展開なんぞ予想できただろうなあ。

朝からセグウェイに追つかけまわされて、おまけにサブマシンガンで狙われ撃たれで命の危機がすぐそこまで迫つてくるようなバッドな朝なんて。

つーか何？ なんで俺みたいな生徒が狙われる訳？ なにか憑依する前のキンジ君が恨まれちゃうよいつなことした？ そりや武偵は恨まれやすいつて聞いてるけどさ。

「（落ち着け落ち着け。 何か手はあるはずだ）」

必死にチャリをこぎながら策を練る。

瞬間、二つほどいいかどつか分からぬ策が練りあがる。

「（まずはベレッタで銃口部分に弾をブチ込む……ああ、無理だよクソッ！ 昨日他の練習してて銃の練習してないから成功確率は低い。 だったらチャリからセグウェイに飛び移つてバタフライ・ナ

「イフで切り裂くってのは……ダメだ。 絶対に飛び乗る前に銃で撃たれてあの世行きだ」

完全に手詰まり状態のまま朝の第一グラウンドに近づく。  
運が良いのか悪いのか、いつも通り誰もいない。  
仕方がないのでその入り口に掛けでチャリをこぐ。

その時だつた。

俺の頭が瞬時に妙案を思いつく。

俺が憑依する前に貰つたあの能力。

滅竜魔道士が使う滅竜魔法の中の一つ、炎の滅竜魔法。

あれならこの距離からでもセグウェイを破壊できるんじゃないのか？

「（幸い人はいない。 練習もした。 これならやれる！…）」

決まったとなれば即実行。

チャリをこぎながらセグウェイの距離と技のタイミングを計る。

「 はい？」

ちょうどその時だつた。

俺はこのありえない状況の中、更にありえないものを見た。

グラウンドの近くにある七階建てのマンション 確か女子寮だつたはず の屋上の縁に、女の子が立つていたのだ。

武道高のセーラー服に遠目でも分かるピンクのツインテール。

そしてその女の子は 急に飛び降りた。

「（おいいいいいいいい！ 飛び降りしちゃつたよおおおおー）」

一瞬ペダルを踏み外しかけたが慌ててこぎ直す。

ツインテールをなびかせながら宙に舞う女の子は  
事前に屋上で滑空準備させてあつたらしいパラグライダーを空に広  
げる。

しかも二つ巴目掛けて降下してきた！

「（つーー！まさか銃でぶつ壊すのか。 だつたら頭を下げないと）

俺は邪魔にならないために急いで頭を下げる。

その行為はすぐに正解だったと気付く。

少女はブランコみたいに体を揺らして「一」字に方向転換したかと思う  
と、右、左。

左右のふとももに着けたホルスターから、それぞれ銀と黒の大型拳  
銃を二丁抜いた。

「そこ」の生徒！ そのまま頭を下げてなさいよー！」

バリバリバリバリバリバリツ！

セグウェイを容赦なく銃撃したよ！

不安定なパラグライダーからの正確な二丁拳銃の水平撃ち。  
もちろん敵は反撃する間もなく撃沈。

恐ろしいぐらいに洗礼された技だな、ホントに高校生か。

くるりくるくる。

二丁拳銃を回してホルスターに収めた少女は、今度は、ひらり。  
険しい表情のまま俺の頭上に飛んでくる。

そうだった、まだ安心なんかできないんだつた。

俺のチャリのサドルの裏には爆薬がひとつついている。  
建物を破壊させるのには十分なぐらいの量がな。  
俺は第一グラウンドへ入る。

「来るな！ このチャリには爆薬が積まれてるんだ！ それも車が消し飛んじまうべりいのだ！ 後は俺だけでどうにかするからお前は離してくれ！」

「 バカっ！」

俺の真上に陣取った少女は……げし！  
白いスニーカーで俺の脳天を力いっぱい踏みつけた。

「 武偵憲章一条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ！』  
いくわよ！」

少女は気流をとらえてフワツと上昇する。

華麗なパラグライダー捌きに、俺は踏まれた悲しさやむなしさも忘れてその光景を見上げてしまつている。決してパンツが見たいんじゃないぞ。

その運動神経のすごさは認めるが、スペツツははいて今は見えなかつたけどいつか見られるぞ。

ていうか、『いくわよっ！』とは言われたのはいいが、一体全体あの少女は何をする気なんだ？

俺を助けてくれるのか？ いや、どうやって？

少女はグラウンドの対角線上めがけて再び急降下しこりうに鋭くヒターン。

そしてさつきまで手を引いていたブレーキコードのハンドルにつま先を突つ込み、逆さ吊りの姿勢でこちらに向かってきた。  
そのままものすごいスピードでまつすぐ飛んでくる。  
都合、俺は少女に向かって走るような形になった。

「……マジでか。まあいいや。乗つてやるよ。その方法にー。」

俺は少女の意図が分かり全力でこじべ。少女は俺が意味を理解したと気付くや否や、

「そのまま飛び付きなさいー。」

「了解！ ありがとよ、お嬢さんー。」

俺はかなりの至近距離まで少女に近づく。

ついで昨日見たアニメ映画にこんなシーンがあったと想ひ。でもあれって、男と女の位置が逆だったような……

そつ考えた瞬間 上下互い違ひのまま俺は少女と抱き合つた。そしてそのまま空にさらわれる。

息苦しげりに頭が押し付けられた少女の下つ腹から、クチナシの薔のよつな、甘酸っぱいいい香りがした刹那

ドガアアアアアアアアアアアアンシッッ！ー！

閃光と轟音と、続けて爆音が辺りを支配する。

あ～……やっぱりあの爆弾は本物だつたんだな。

熱風に飛ばされながら俺達は仲良くグラウンドの片隅にあつた小さな体育倉庫の扉に、減速なしで突つ込んでいた。

…………あのチャリ、買つたばかりだつたんだけどな。

また買わなきゃならないから金が必要だな。  
どうしてこうも俺は懐から金が出るんだるひうね。  
悲しいね、俺の気持ちと懐は。

### 第3幕 嵐つていつの間にか来るんだよな……ていうか死ぬからっ！（後書き）

主人公設定

遠山キンジ（オリ主憑依 + 強化版）

学科：探偵科 強襲科

武器：ベレッタ【キンジモデルカスタム？】 × 2

デザート・イーグル × 1

バタフライ・ナイフ × 1

特殊仕様の逆刃刀 × 1

竜炎補充用特殊加工小型火炎瓶 × 5

能力：ヒステリア・モード（現在一種類）

炎の滅竜魔法（現段階ではG8～G15）

主人公だった遠山キンジに死んでしまったオリ主が憑依した、いわゆる『強化版・主人公』のような感じ。

色んな人に対して甘い部分はあるが、その分かなり真面目な性格。それ故に嘘を付くことや隠し事が苦手。

憑依後は女性にやたらとモテるようになる。

バ力なことも考えたりはするが実力もそこそこで、どんな相手でも立ち向かっていく。

頭は生前に勉強しまくっているためかなり良く、また体も生前に鍛えていたため通常モードではキンジの身体能力の約1、3倍。

また本人は知らないが滅竜魔法を使う際に体が耐えられるように体は滅竜魔道士並みの頑丈さを持っている。

キンジが元々『超偵』では無かつたので原作序盤では人前で滅竜魔法を使用することをためらう節がある。

恋愛事には鈍感ではないものの、あまり知識を持つていません。

人の好意には素直に答えるタイプ。

やや不幸体質も持つが本人は気にしていない。

## 特殊能力解説

### 『ヒステリアモード』

元は性的興奮を感じると思考力・判断力・反射神経・などが通常の30倍にまで向上する遠山家のの人間が持つ特異体質。

だが憑依後のキンジは神の力により自分でヒステリアモードを制御できるようにしてもらっているため、一つ以外は自由自在に使える。その代わり、興奮しても発現しないなどの欠点も存在する。

更に憑依後キンジが使えるヒステリアモードには通常モードの「ヒステリア・ノルマーレ」、死の危機に瀕した際に発現する「ヒステリア・アゴニザンテ」、女性を他の男性に取られた際に覚醒し、発現する「ヒステリア・ベルセ（ノルマーレの1・7倍）」、そしてオリジナルで、体力や魔力が極限まで消費している際、比較できな程滅竜魔法の威力を上げる「ヒステリア・オーガ」の四種類が存在する。

「ヒステリア・オーガ」以外は自由自在に扱えるが、他のヒステリア・モードの存在を知らないため今のキンジは「ヒステリア・ノルマーレ」しか使用できない。

### 『滅竜魔法』

#### 竜迎撃用の強力な魔法。

滅竜魔法を使える者を滅竜魔導士と呼ぶ。  
ドラゴンスレイヤー

術者の体質を日々の属性の竜に変換しているため、身体能力も大幅に強化されている。

自らの属性と同じものを食べることで体力回復、強化が可能。

キンジは炎の属性なので火などが該当する。

また他の属性の物を食べるとその属性の力を炎の力と同時に使うことができるが、翌日に能力を使った強力な代償が現れる。

(例) ジャンヌ 氷炎竜  
ヒルダ 雷炎竜

やばい……チートになつたかも。

## 第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだな……（前書き）

今日は……というか今回も駄目文です。  
本当にすいません。

## 第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだな……

「う……つ。 痛ッてえ……左肩打つちまつたか……」

どうやら少しの間氣を失っていたらしい。

俺は左肩に走った鈍い痛みと共に意識を覚醒された。幸い打ちつけた程度だつたため、すぐに痛みは引くだらう。元の俺もこれぐらいならすぐに治つてたし。

とこうのような感じですぐに辺りを軽く見渡す。

俺がいるのは薄暗い倉庫のようなところだと判断する。ああ、そういうえばさつき体育倉庫に突っ込んだんだ。そんでもって肩打ちつけたのは跳び箱だつたらしい。

だが今はそんなことよりも買ったばかりのチャリのことが悲しい。まだ一ヶ月しかたつていなかつたのに。

泣きつ面に蜂とはまさにこの事。

憑依一日目から某上 麻さん並みの不幸に見舞われっぱなしだよ。

そうこやあ憑依してからはとことん運が無かつたな。

初日から銃が暴発して頬を掠るわナイフを踏んで血が出るわ間違えて手から炎を出して火災になりそうになるわ何か変な請求書が来るわ。

もう「」の時点で泣きそつになつたね。

でもやつぱ運は回つてこないものだよな。

一田田になつても寮に白雪が来るわチャリに爆弾が仕掛けられて追い回されるわシニイのサブマシンガンを連射されて何発か頬を掠る

わ。

もつ鬱になるよ……一回死んでるから死んでも悔いないけど。

「（ていうか、さつきから良いにおいが鼻に入つてくるんだが…）」

そこまで考えようやく気付く。

俺を助けてくれた少女の姿が見当たらない。  
急いで辺りを見渡すがそれらしき人影はない。

まさか……さつきのはハマーン・カーンだつたとでも言つのかつ！  
……いや、別にラク・クーンでも何でもいいけど。  
とりあえず美人な人だつたらどうでもいいんだけど！

「？？ 何かさつきから重いような感じ……が……ハウッ！」

だが俺は直後に凍りつく。  
なぜか……なぜか俺に人の体重みたいのがかかってるな  
とか思い、下を見てしまつた。  
するとビックリしたことでしょう。

先ほどの女の子が俺に体を預けるような形になつてゐるではあります  
せんか。

それも俺と同じく氣を失つてゐる状態。

あの女子寮から飛び降りて、パラグライダーに乗つたまま戦い、俺  
を空中にさらつて助けてくれた勇敢な少女の面影などどこにもない。  
どこにでもいそうな普通の女の子だつた。

「（や、やばい……）すがに密着しちゃだら……」

少女が俺に体を預けるよつた形になつてゐるのはまだいい。  
【警告・見え方によつては襲つてゐるよつて見えるので注意しましょつ】

だが今の体勢はさすがにまずい。  
分からないとと思うから俺なりのレポートでまとめてみたした。  
はい！ シルエットショ―をじゅくじゅく鑑賞してくださいですだおー！

俺のわき腹は彼女のふとももによつて挟まれてゐる。  
両肩にも彼女の腕が巻きつゝよつてなつてゐる。

結果的に言えば、俺はお姫様抱っこをしてゐるよつた形になつていて。

一部の男子からさぞかしふりやましことか思われるだらうな。

ええ、なんでそんな事になつて氣付かないのかとか思うでしょつ？  
俺も今思つたよ！ 思いまくつて思いまくつて涙そうそう…  
すいませんでしたよ！ 意味が分かりませんよね！  
手つ取り早く言えば全く氣が付かなかつたつてことですよー！

しょつがないですよ、じつちもじつちで混乱してたんですかい。  
ちょっと敬語みたいになつてしまつたのがその証拠。  
決して十八番ではないのでお間違えなく。

十八番だったら俺捕まつて三倍の刑が下つちゃうからね。

「（うん、現実回避もそろそろ限界になつてきたな。 つていうか

早く起きてくれないものか。さすがにヒスらないければひとつ色んな意味で起きてほしいんだけど」

「（声を掛ければいいじゃないか『心の中の俺の声』）」

「（や、そうだよな） な、なあ……起きてくれない？」

声を掛けたが答へは返つてこない。

未だに気を失い続けているようだ。

その目を縁取るのはツンツンと長いまつげ。

甘酸っぱい香りの息を継ぐピンクの唇は、桜の花びらのように小さく。

ツインテールに結われた長い髪は、細い窓から届く光に、キラキラ……と豊かなツヤをきらめかせていた。色はピンク、それも珍しいブロンドピонクだ。

「ん？」

俺が少女を見ていると、彼女の名札が目に止まる。

今日が始業式なので学年やクラスは未記入だったが、名前は書いてある。

ええと 『神崎・H・アリア』。

「（Hの子の名前か。でも珍しいな、名前に『H』が入ってるなんて）」

その名前を見た時、どこかで見たような錯覚がした。しかしそれが何だったのかは思い出せない。

まるで無理やり記憶から消されたような。

そんな不思議な感じだけが、今は残っているのみ。

少しかわいい顔をしていても思つ。

と同時にここまで経つても田を覚まなこととも心配になつてきた。

そこで、思わず顔を覗き込む俺。

「(ぬ~……好きになる奴はなるんぢやないか~)」

だがそんな思考は一瞬で消し飛ぶことに。

なんとこのタイミングで少女が田を覚ましてしまつた。

「…………へ?」

「…………ど、どひも…………」

同じ高校の奴に敬語を使つてしまつた。

もう何この嫌がらせ。

神つてマジで俺を笑うため元の世界に送つたんぢやないだらうな?

……いやこやこやこや。 勘違ひはしないでね皆の衆。

田は速く覚ましてほしかつたんですよ、ハイ。

ただね……タイミングがおかしいぐらうに悪かつたんだす。

はいっ~。 ここで一体何が起こるでしようか?

なんかす"こな~可愛にな~、とか思つて少女の顔を覗き込んだ。

そこまではいい。 いや、あんまり良くないけど。

と・に・か・く……!

そこで田が覚めたようで田を開けました。

はいっ~。 ここで一体何が起こるでしようか?

答え:【襲われると匂ひは思つ。 または何かピーピーな事をさ

れると思つた】

【謝罪・まいじまこじすこません。慣れてくださいこまか】

まあつまつやうこりとじゆ（じりこりとじだよー。b/s 驚作者）。  
で、何が起つるかと聞こますとね。

じつこりとが起つるので注意しましょ。ひ。

あ、取り合えず問題出しまへす。

この後俺にびつこつた展開が訪れるでしょうか？

答えはウハブ……じやなくてニコース……この後すぐで。

\*少しの間、音声のみでお楽しみくださいこ【ー(。ローノ) (ヽロ。) /】。

「<……<……」

「あ、こや、ちゅつヒー、」、誤解はしないでくださいこまかお嬢さん

「違つひてー、俺はヘンタイなんかじやないしあんたを襲つ氣もな  
いー。」

「じや、じやあなんであたしの顔を覗き込んで見てたのよー。」

「起れないから心配になつたんだつてー。」

「声を掛けてくれたら良かつたじやないー。」

「掛けても起きなかつたから心配になつて覗き」んだんだ！ 本当に悪い！」

答え・勘違いされまくつて怒鳴られまくる（笑）

おい作者！

（笑）つて一体どういうことだ！

俺の生死はそんな簡単に扱われるものなのかな！

主人公補正があるつていつても限度つて単語があるだろうが！

【謝罪・まいどまいど以下省略】

つて突つ込み入れてる場合じゃねえ！

俺も俺で何クイズ形式で落ち着いて問題出してんだよ！

落ち着けるような場面じゃねだろ、今は！

「本当に悪かつた！ 謝るから……痛ツ！」

再び左肩に鈍い痛みが走り、思わず押さえながら目を瞑る。何かなつてんのかと思つて左肩の部分だけ服を脱ぐ。そしたら……え？ 何かめつちや腫れでんだけど、左肩があ、ヤヴァアい。

こんなのを神崎の前で見せたら……

「え……か、肩……怪我したの？」

「だ、大丈夫だから！ お前のせいじゃないからー。」

こうなるから嫌なんだよ！

前の世界でもこれで一回人泣かしてるんだから、俺よ。

あ、でもあの時は俺がリアルで泣きたかったな。

女の子庇つて三七トラックに真正面から撥ねられたんだから。  
受け身取つたから右腕骨折で済んだけど。  
取り損ねてたら内臓破裂してたって話されたけど。

つて今はそんな事どうでもいいよ。

頼むからあの子をどうにかしてくれ。

もうなんか『本当に『めんなさい』みたいな顔してるから。

「『』『めんなさい』……」

「いや、別に気にすんな。 お前を受け止めた時に受け身を取り損ねた俺が悪い」

「……やつぱり……あたしの、せい……」

「だから違うって！ 俺が未熟なのが悪かっただって！」  
本格的に泣きそうになつてゐるよこの子！  
自信家ほど精神が不安定な生き物なんて……いるけど！  
今のこの子はもつと不安定なの！ 分かつて！  
そこまで俺が考えた直後だつた。

ガガガガガガガガガガガガンッ！！

突然の轟音が体育倉庫を襲う。

慌てて俺と神崎が音のした方を向くと  
JN-Eが七台、俺達の方に銃口を向けている。

「つチ！ 神崎、ちよつと我慢しinよー。」

「えつ？ きやー。」

俺は神崎を再び抱っこする飛び箱の後ろ側にすばやく移動。直後に俺達がいた場所には銃弾が容赦なく撃ちこまれていた。あ、危ねえ……なんて非日常だよ。いや違うわ。銃撃だつた。

「うーー！ まだいたの？」

「あれって『武偵殺し』の所有物か？」

「うーーうん……『武偵殺し』のオモチャよ

「もひろん銃も

「本物」

やつぱりそつかよ。

だったら飛び箱が防弾使用で助かつたぜ。

普通の木製のなら貫通してOUTEだつたな。

「……だがそれならそれで気に食わないな

「えつ？」

「そうだろ？」

あんな卑怯な手で人を殺すんだぜ。

完全にふざけているとしか言いようがない。

人の命は一つ、それなのに一体何を考えてやがるんだ。

そんな奴は……俺が捕まえて、尋問科に渡して尋問を受けさせてやるお！

「相手は七台か……神崎」

「な、何……？」

「今から見たこと、無かつた事にしてくれよ」

「え！？ あ、ちょ、ちょっと……！」

神崎の言葉は続かなかつた。

それはなぜか？

簡単だ、俺が空中に飛んだからだ。

「（今すぐなれよ！ ヒステリアモードに！）」

直後、目を瞑つた俺の身体は一瞬熱に包まれる。だが次の瞬間、目を開けた俺はすべてを理解した。すげえよ……すげすぎるぜ、これは。

周りのすべてが自分の支配下みたいに感じるぜ。

ズガガガガガガガガンッ！

再びH2Eは俺に向かって銃弾を浴びせてくる。狙いはすべて脳とか心臓付近。

いい狙いだし、タイミングもいいな。

そりや空中にいれば格好の獲物だもん。

通常、人間は空中で行動は出来ないのが普通。足場がない上に体がついていかないからだ。

「（無いなら、作ってしまおうホトトギスー。）」

銃弾は全部で74発。

まさに絶体絶命のこの状況

たた俺は変える力を持つていてる

バタフライ・ナイフを少し前方に飛ばし、柄の部分に手を付ける。  
そのままグルンッ！ と空中での一回転。

「ア、アーラー……」

なにやら感心するような声が聞こえた気がするが気にしない。  
とはいえ残りは36発か……まだ多いな。  
残りを避けきれなれば俺はTEDENO D。  
だが神よ、俺はまだ死なんぜ！

「残念だが、俺には当たらない！」

今度はマット・シルバーのベレッタ・M92Fを一丁引き抜く。  
狙いはサブマシンガンが放つた銃弾。  
撃ってきた銃弾を撃ち落としてやるお！

ガガガガガガガガガガガガガガガガガン！

合計で十六発、銃弾をベレから放つ。

その銃弾は様々な角度から俺に向かってくる銃弾に当たる。  
あつという間に飛んでくる銃弾の数は6発に。  
だがマガジンを換える余裕はない。

否、いらない。

「火竜の、鉤爪！」

今度は横に一回転。

だがただ一回転したんじゃないぞ。

足に竜の炎を纏いつつ、銃弾を蹴りながらだ。  
炎の蹴りを受けた銃弾は音を立てて燃える。

竜の炎は伊達じやないな。

「今だ神崎！ マシンガン撃つてくる前に撃て！」

「わ、分かつたわ！」

さすがは武偵。

この変わった状況に素早く対応してみせた。  
その才能、ちょっと分けてはくれんかね？

ズガガガガガガンッ！

神崎の放った銃弾がH2Eの銃座を破壊する。  
だがまだ足りない、後一台残つてゐる。

「それでも上出来！ 火竜の、咆哮！」

口から炎を噴射し、残ったヒニエもろとも銃を焼きまくる。

え？ 普通の人間は口から炎を噴かないって？

じゃあ俺は普通の人間じゃないってことだろ。

何はともあれ、俺達はヒニエを無事潰せたらしかった。

「あ、あの……」

「うん？」

俺が使えなくなつたガラクタ同然のヒニエを拾つていると神崎が声を掛けてくる。

顔が少し罪悪感に染まつてゐるのは氣のせいではないだらう。

まださつきの事を気にしてゐるのか？

あんなの、別にいいのに。

「謝らなくともいいぞ。 元々俺はお前に命を助けられてるんだ。俺は感謝こそしてお前を罵りはしないし出来ない。 さつきは助かつた」

薄く微笑む俺。

それでもまだ神崎はバツが悪そつた顔をする。

俺はおかしくなり、神崎の頭を優しく撫でてやる。

なんか妹が出来たような感じがするな。

「ちょ、ちょつと……」

「え？」

「神崎がさつきの俺の事を黙つてくれたら、チャラにしよう。 もし話したら

「は、話したら……」

「その時は、バーンッ！」

神崎に向かって指で銃を撃つ真似をする

あ、あれ？ なんかミスつたのか？

۱۵۵

何か知らんけど笑われてる！

何これ何これ何て言う名の羞恥フレイですかこれは！めつた恥ずかしいんすけど！ 穴があつたら入りたいんすけど！

あんた、面白いのね。

「あんまり言われない」

とはいっても、うして、訳にはいかない。  
話をしながらも作業をしていたおかげで、すぐに終わつた。

「俺はこれから教務科に行つて報告しないといけないからこれで

手でジエスチャ―をしながら囁く。

神崎は……頷いてから俺に質問してきた。

「えつと、な、名前は？」

「俺？ 遠山キンジ、今は探偵科に所属してるよ。 神崎・H・アリアさん」

「あ、アリアでいいわよ」

「そうかい。 じゃあアリア……一緒にクラスになれるといいな

「う、うん！」

元気よく頷いてくれた。

それに笑顔で返しながら今度こそ教務科に報告しに行く。  
アリアならそのまま教室に行くだろ？

……さて。

蘭豹や綴に何で話したものか。

体育倉庫を誤つて一部燃やしてしまいました、とか。

ああ……俺がお空の星になるよつた図しか浮かばんよ。  
ごめんよアリア。

もしかしたら、俺の寿命は尽きたかもしれん。

#### 第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだな……（後書き）

なんか拍子抜けするような出会いでしたすいません。  
ですから批判はなるべく穏便にお願いします。

## 第5幕 何やら不穏な空気が漂つてゐるな…… ついでに何かオリジナル展開じやんー（前書き）

今回は少し長めになりました。

後オリジナルの組織も出そつと考えております。

嫌な方はどうか抑えてくださいるようお願いいたします。

## 第5幕 何やら不穏な空気が漂つてゐるな……ていつかオリ展開じゃん！

俺こと遠山キンジは現在保健室にいる。

前回の話で教務科に報告しに行つたんじやなかつたの？  
みたいな考え方を持つ人、安心しろよ。

ちゃんと教務科がいる職員室に行くには逝つたから。  
ん？ 逝くの漢字がおかしくないかつて？

大丈夫大丈夫、全然大丈夫。 それはそれでちゃんと合つてゐるから。

「たのもーー！ 拙者は道場破りで『ジギトス』よー！」

「黙らなこと殴るわよ。 君、名前は？」

「遠山キンジです。 今年から2年で所属科は探偵科ですけど」

「いや、別に先生そこまで聞いてないんだけど」

「そんな些細な事を気にしてたらすぐ『老けますよ』、いいんなんですか？」

「キメキバキボキズデデデンシ！

俺の腹からあり得ないよつた音が辺り一帯に響く。

そのまま俺の身体は薬品が並んだトレイの方向に飛んでいく。

〔冗談じやない、薬品はあまり好きじやないんだ。

空中で2回転して、トカゲのように天井に張りつく。

そのまま吹つ飛ばされ続けて薬品がぶるよりは遙かにマシだ。

ていうか保健の先生ってこんなに強かったのか？

後で不知火にでも聞いてみようかねえ。

武藤は……先生美人だから何か知ってるかもしれないな。

「君、ちょっと失礼だけど面白いわね。 体も頑丈そうだし」

「そう言つ先生は滅茶苦茶強いっすね。 何か格闘技でも習つてるんですか？」

「拳法とボクシングとカボエラとムエタイ。 後は陰陽術」

「最後の陰陽術だけ今度教えてもらつてもいいですか？」

「いいよ。 君はとっても面白そうだからね。 先生久しぶりに興奮しちゃつた」

興奮するのはいいけどあんまり女性は言わない方がいいと思います。 变態とか思われちゃいますよ。

まあ、口に出しては言わないんですけどね、決して。

だつてそうだろう。

あんな破壊力抜群のコーケスクリュー・パンチなんて2度と喰らいたくねえよ。

危うく俺のコーエモアあふれる意識が刈り取られるところだつたんだぞ。

舐めるなよ、あの先生のコーケスクリューの恐ろしい威力を。 間違いなく戦場の第一線で通用する代物だよ。

階級は間違いなく大佐。 あつという間に出世だな。

「先生じゃなくて優花さんって呼んでほしいな」

「心を読んだだとつー？　お主、見たところのやうの強者だな？」

「ふふふつー　越後谷よ、お主も立派な悪よのう」

「それ越後谷と悪代官じやないつすかー　後誰が越後谷だー」

突つ込んでハシと氣づく。

先生……じゃない、優花さんは嬉しそうに笑つてゐる。

畜生、まんまと踊らされたつて説かよ。

どつちが越後谷でどつちが悪代官か分かつもんじやないな。俺と優花さん、どつちも越後谷でも悪代官でもないけど。

あ、ちなみに優花さんと今やつたのは一種のゲーム。  
確か『先に突つ込んでじや負けよ、マイダーリン？』とか言つやつ。  
考えたのはおバカな武藤よりもバカな奴。

後マイダーリンとかハートマークとか意味がわからん。

また暇があつたら脳細胞を50000個死滅させてやる。

「ま、取り合えず話を進めようか？」

「わづですね。」れじやあ夕方になつても終わりませんし

自分達からやつとこで何言つてんだ？

とかその他もろもろの批判なんかは受付ましょん。

文句があつたら作者にどつぞ。

俺は一切知らないから。だつてほほ無関係だしね。

「リリに来た理由は？」

「学校に来る途中にセグウェイなんて物に装備されていたサブマシンガンの嵐から俺を助けてくれた神崎・Hアリアという女生徒を庇つて体育倉庫に突っ込んで上手く受け身が取れずに防弾仕様の跳び箱に左肩をぶつけてそれで左肩が腫れてたのと体育倉庫の一部を燃やしてしまつて報告と謝罪をしようとさつき教務科の蘭豹先生と綴先生の所に逝つた時に思い切りグーで殴られたので右の頬と太ももが少し腫れてて。それで何か良い薬はないかと思いここに来ました」

「色々言いたいことはあるけど……取り合えず殴つていい?」

「横暴だ! 僕は今何も余計な事言つてないのに!」

やつぱりこの人、かなり怖いよ。  
その内優花大佐とか変なあだ名が付いちやいますよ。  
いいんですかそれで。 貴女は大佐でいいんですか。  
信用と信頼は決してお金なんかでは手に入らないんですよ。  
あれ? 信用と信頼つて同じような意味だよな?  
まあいいか。 これも駄作者のせいにしておけば綺麗をつぱり解決だ。

「……まあいいわ。 それでど? 見せて頂戴」

「あ、はい。 この辺りなんですけど」

「どれどれ……キンジ君、一応腫れてるけどそこまでじゃないわよ

「えー? マジすか!」

自分でも確かめてみるが優花さんの言つとおり。

腫れていることには腫れているのだが、あまりひどくはない。  
自然回復能力にしてはいくらなんでも速すぎないか？

といふか憑依前のキンジ君、そこまでのスペックなかつたはず。  
俺の身体能力も何か格段に上がつてゐみたいだし。

こりゃ神に一度聞いておいた方がいいかもな。

と言つても通信手段なんか無い訳だが。

「一応湿布でも貼つておく?」

「あ、じゃあ1枚だけ頼みます」

「1枚だけつて……いくつ使う気よ?」

「いつもなら1か所に3枚ぐらい貼つてるんですけどね」

「使い過ぎ。資源が無くなつてきてるんだから大切にしなきゃ」

「一体どこのお偉いさんですか、貴女は」

「過去に環境大臣になつた経験があるわよ」

嘘付け、あんたがなれるわけないだろ。

ていうか未だにそんな大臣の役職が存在するのか。  
そもそもそれってあつたものなのかな。

政治にはあまり興味関心が無かつたから疎いな。  
今度勉強しておくとしよう。

「うと……もう大丈夫でしょう」

「有難うござります。 それと優花さん」

「何かしら?」

「左後ろに毒を塗った短刀構えるのはいいんですけど……ばればれ  
ですよ」

「つー……嫌ね、キンジ君。 何を言つてゐのかしら?..」

さつきまでと同じように接していく優花さん。  
でも残念ながら、俺にはもうばれていますよ。  
さつき一瞬だけ気付かない程度怯んだ。  
そして大した反論もしてこないといふを見ると、当たりのよつだ。

ちなみに気付いた理由は一つある。

一つ目は俺に向けて飛ばしてくる微量な殺氣。  
本人は隠しているつもりだろうが上手く隠せていない。  
まあ、俺だから分かったのかもしねないが。

そして二つ目は毒の薬品の臭い。

これは致死性の毒ではなく、恐らく神経毒。  
多分斬つたら毒で痺れて動けなくなる  
とかの方の神経毒が刃全体に塗りつけてあるんだろう。

しかし……これは困ったな。

目を付けられてるつて事だからな、導き出される答えは。  
俺が憑依していることは恐らくバレてはいない。  
バレているなら自身の正体を明かし脅迫していくはず。  
これでこの線は消えた。

可能性があるとすれば、憑依前のキンジのカリスマ性を狙つたものか。

それともビートの組織が命じた殺害が目的か。  
あるいは……本当に俺の正体を見破つた者の命なのか。

まあ、いずれにせよ今は警戒つて事でいいか。  
向こうも俺が今ので気付いたつて事は承知の上。  
慎重に物事を進めたいのが定石だらう。

派手にすればこちらが不利になる。

しばらくは様子見だ、良かつたね優花さん。

「すいません。 ひょっと言つてみたかつただけなんで」

「やひ。 でもあまりそんな冗談は言つちや駄目よ」

「そうですか。 では俺はこの辺で」

「ええ。 またこりつしゃー」

「暇があつたら。 ですけどね」

そのまま保健室を後にする。

なるべく早いうちにその場を去りたかった俺はあえて無視をする。  
自分を見ていると思われる一つの視線を。

「どうだった、優花」

私の名前を呼びながら、一人の女の子が保健室に入つてくる。でもその声は今の私の耳には聞こえなかつた。

なぜ、彼にまんまと短刀を見破られたのか。

それだけがさつきから気になつてゐる。

私が放つていた殺氣はほぼぼに近かつたはず。

遠山キンジは確かに一種のカリスマ性を持つてゐるとは聞いていたけれど、それはあくまで彼がHSSの状態になつてからの話。

普通の状態だつたら絶対に気付かないはずなのに。

「むへ……優花！　聞いてるの」

「へつ！？　あ、ああ……」めんなさい袖。　聞いてるわ

「本当？　何かぼーとしてていつもの優花らしく無かつた

「わ、私らしく無かつたかしら？」

「そうだよ。　いつも主導権を握るのに、今日は握られっぱなしになつたし」

「そういえば、そんな気がしなくもない。

彼はまだふざけていただけのようを感じた。

だから用心しなくていいと思つたけど、実際は違つたようね。

「しかし……遠山キンジ君、彼って何者なのかしら?」

「唯者では無いといつ事だけは確かですよ」

「え、円超君。早く降りてきなさい」

「了解」

華麗に天井から降りてきた青少年の頭を一発叩く。

何だか涙田になつてゐるみたいだけど……『気にしない』方向で。元はと言えば円超君が悪いんだしね。

「それで唯者では無いといつてどういふこと?」

「簡単です。 じつらの行動はすべて見破られていきました」

「もつと具体的に」

「言ひなれば、私達二名が見ていたのにも恐らくですが『気付いています。 そして優花さんの短刀にも気付いていましたし。 何より田が違いました』

「田?」

「はい。 最近のこの東京武僧高は唯でさえ緩いのに加え、更に緩くなつてゐる傾向があります。 しかし彼は少數のまともなグループの一人であるということ。 田つきが明らかに違いました。 まあ、一筋縄ではいかないような相手だということです。 先ほども優花さんがどれくれいできるかなども計つておられたかと」

……あんな甘い判断をした自分がバカに思える。話を聞く限りじゃあ相手の方が一一手も三手も上。よく手を出せなかつたと自分をほめたくも思つわ。

「要するに?」

「今は慎重にいべきかと」

「えー! 柚があいつと戦つて勝てばいいんでしょう? じゃあ早いじゃん!」

「敵は何かを隠し持つています。それが何かは分かりませんが……とにかく。これは一度ボスに報告しておるべきだと思います」

「……そうね。じゃあ解散していいわよ」

「了解」「ふ……了解したよ」

そう言つて一人は保健室を後にし、一人残つた私はますます彼について興味が出てきたわね。組織での話じゃなくて、個人的にも。まずは彼の過去でも探つてみましょうか……。知らず知らずの内に私の心は躍つてしまつていた。

「ふーん……俺に目を付けてる組織がもつあるのか」

保健室に仕掛けってきた盗聴器から聞こえてくる三人の人間の会話。それを聴きながら俺はため息をつく。

だつて下手したら襲われたりするかもなんだぜ？

なのにテンションなんか上がるか。いつも通りだよ。

盗聴器は天井に張り付いた際に付けといた。

やっぱ正解だつたな、盗聴器付けたのは（笑）。

「それにしてもあの円超つて奴は中々のキレ者だな。あいつが欲しいな」

おつと待て待て。勘違いするなよ諸君。

一話辺りにも言つたはずだが俺は断じてB-Lじやない。

健全な男女のあれとかは……まあ恋愛とかは一回してみたいと思つ。

つてそういうんだよ。

ただ単純に、円超がこっちに来てくれれば物事が有利になりそつていう邪まな考えがあるからこそあいつが欲しいんだ。

分かるか？いや、嫌でも分かつて。

でも優秀とは言つても盗聴器は見破らなきゃダメだろ。あれ結構分かりやすいような大きさなのに。

直径三センチメートルの長方形なのに。

「まあしばらくは様子見つてことで。先はクラスに行つてからだな」

さつき職員室に行つた時に見せてもらつたが、俺のクラス。悪くはなかつたが別に良いつて事でもなかつた。

そもそも憑依前のキンジ君根暗だつたから友達少ないし。

女子には何か嫌われている傾向みたいなものがあつたし。  
でもなぜか慕つてくれる人とかちょっとはいたり。

結構微妙な立ち位置なんだよな、主人公って。  
目立てるけど疲れちゃうみたいな。

まあそれを選んだのは俺だしそうしたかつたていう気持ちもある。

それに友達はこれから作つていけばいいしな。

よっぽど嫌いな奴じゃない限りある程度仲良くなはできるだろ。  
初めは驚かれるだろうが、時がたてば自然となじむ。  
どつかにありそうな天然素材とかと一緒に。 人間の心は。

「ん？ あれはアリアじゃないのか」

さて。俺のクラスである2年A組の前に到着した。  
そこでさつき知りあつたばかりの女子生徒、神崎・H・アリアと遭遇。

決して格闘などのコマンドはでないのであしからず。

「あ！ キンジ！」

「アリアよ。 今クラスの方では何か話してるから静かにしようぜ」

「あ。 う、ごめん」

しゅんとした所で体育倉庫の時に軽く頭を撫でてやる。  
すると顔を赤くしてわたわたと少し動搖した。  
やべえよこれ。 何か結構面白いぞこりゃ。

……げふんげふん。

今はそんな事をするような時間帯じゃなかつたな。  
取り合えず聞くこと聞いてクラスに入らねば。

「見たところアリアも俺も2年A組だ。やつたな」

「うんー。」

「でも教室の外で待つてるって事はアリアは転校生なのか？」

「え。 なんで分かつたの？」

聞くところじゃないよそこは。

俺はね、転校生だつてことだけが聞きたかったのに。

これはアリアに説明しなくちゃいけないな、簡単なのに。

「クラスが決まっているのに教室の外で待機。 何か怒られてしまつたんならそれもあり得るだろうが今日は始業式なので普通は怒られない。 だつたら転校生とかスパイとかしか考えられない

「スパイも考えられないわよ」

「鋭い突っ込みだな。 また今度頭を撫で撫でしてあげよう

再び慌てだすアリア。

この子あれだな。 強気なんだけど、攻められるのには弱い。  
攻め専門みたいな感じだな。 今度から暴走したらこの手でこいつ。

「じゃあ俺はもう教室の中に入るな

「うん。あ！じゃあキンジ、一つだけ」

「何だい？」

「なんで頬つぺたが赤く腫れてるの？」

「……教務科の恐ろしい女教師2名に殴られたからだよ。  
それ以外にも色々喰らつちゃつたけどね。  
とは言わない。 言えない。

アリアの顔が何か今すごいことになつてそうな気がするから。

気を取り直して俺はアリアとは違う後ろのドアから教室内に入る。  
向こうのドアだつたらアリアが見えるかもしれないだろ。  
それじゃあ面白くない。

転校生つてのは、どんな奴か少なからず楽しみにして待つからな。

「すいません。色々あつて遅れました」

「理由は分かつてますよ遠山君。……大変だつたんですね」

「俺に憐みの視線を向けないでください！ お前らも向けるな！」

早速このクラスが嫌になつちゃつたよ。  
もう今すぐ引き返したいんだけど無理なのかな。  
無理かな無理かな無理かな無理ですね。  
はいすいません、大人しく席に付いちゃいます。

「よおキンジ！ またお前と同じクラスか」

「俺的にお前がいてくれて少し助かったけどな、武藤

「ほお。 それは何故だ?」

「全く分からん奴より信頼できる奴の方がいいだろ?」

「…………」

何を凍りついてるんだ武藤。

後「キンジがまともな事を言つてる」とか言つて止めりよー。  
折角いい事言つてやつたのになんだそれは。

憑依前のキンジ君だつて少なからずお前には信頼してたんだぞ。  
だつたら俺も信頼する。 つざくも想つけど。

「うふふ。 静かにしてね。 ジヤあまはず去年の3学期に転入して  
きたカーワイイ子から自己紹介してもらつちやーりますよー」

それだけ聞くとクラスはざわざわと騒がしくなる。

今のお先の言い方だつたら間違いなく女子だと思つ。  
おかげで男子のテンションは上がりに上がりに上がつてゐるな。

普通はこんな反応をするから放つておこう。

変に「黙れ!」とか言つて印象を悪くする必要もない。  
しかし悲しいかな。

男子がほとんどバカ野郎みたいに騒いでのるのが悲しい。  
お前ら女子の方をよく見てみろや。  
キモいみたいな目でお前ら見ながら引いてるや。

「キンジー! お前転入生、しかも女子が来るのでさと騒げよー!」

「騒ぐにしても来てから騒げばいいだろ。 それに騒いだら変なプレッシャー」「えるかもしね。 だから俺は絶対に騒がん」

「……お前、本当にキンジか？」

「お前の田たには俺がどんな風に映つている?」

「根暗で昼行燈じやない普通の遠山キンジ」

「それが正解だ。 分かつたら大人しく席に付け」

後なんだ普通つて。

憑依前のキンジ君がアブノーマルだつて言いたいのか?  
だつたら武偵高の大体の生徒はアブノーマルじやねえか。  
ノーマルなんてほほ皆無だぞ。

「それじゃあ入つてきて」

先生が廊下側に声を掛ける。

すると一人の女生徒がドアを開けて入つてくる。

神崎・H・アリア。 転校生じやなくて転入生だつたんだな。  
そうならそうと言つてくれよ。 なんか恥ずいじゃん。

ちなみにアリアが入つてくるとクラスがシーンと静寂に包まれる。  
だがアリアの顔を見た男子生徒が次々と「可愛い」やら「お友達になりたい」やら「是非ともいただきたい」などと言つてゐる。  
後最後の犯罪の匂いがする台詞をはいた奴は一体誰だ?

犯罪が起きる前に俺が滅竜奥義使って吹き飛ばしてやる。

だがまあ、何はともあれ同じクラスになれて良かつたよ。  
でも最上級神のアテムよ。

今回もこのまま終わらせてはくれないんだろ？

どうやら俺の第一の人生はどうやらそんな感じで出来てるらしいからな。

## 第6幕 梶藤に理由を、少しは理解しておくれ

「先生、あたしはキンジの隣に絶対座りたい」

「（おやおや……懐かれちゃったかな……）」

いきなりの「」指名に苦笑してしまう俺。

まさか俺ってそんなに気に入られてしまっていたのか？  
そこまでの事をしてしまった覚えなど全然無いんだが。

だが俺は正直言つてお馬鹿だった。

どれくらいかと言つと頭がダイナミックに爆発してしまつぐら<sup>い</sup>い。  
もはや致命傷と言つても過言ではない……はず。

まあいいよこの際どうでもいい。

いつまで経つてもどうでもいいとか思つかもしえないけどね。  
で、結局何が言いたいかと言いますとね。

痛いんですよ、クラス中の視線が俺に突き刺さっちゃつてるから。  
こいつ……四方八方からの色々な感情がこもつた視線。  
正直、裸足でもいいから逃げ出したいぐらいだね。

初めはなんとかな……とか思つて考えたんですよ。  
そしたらあつさりとその理由が判明いたしやした。  
要するに俺が転入生と知り合いだつたからですね。

昔友人だつた奴から聞いた話だと曰く、「美少女が転校、または転入

してきてもしその美少女と知り合いでたら絶対に何もするなよ。  
飢えに飢えて飢えまくつた恐ろしい男共がものすごい勢いで食いつくからな」とか言われた。

この時は「コイツ、何言つてんの?みたいな感じでスルーしたよ。

だがまさかこんな状況でその言葉通りになるとは。  
人生つてのは本当に分からぬものだな。

それでも俺の憑依した後の人生は波乱ばつかりなんだけどな。

「（やーて、現実逃避もそろそろ限界かね）」

大人しく自分の置かれた状況に意識を移す。  
そうでもしないと一生この問題は終わりそうにない。  
問題と言つか、尋問のよつた気がしなくもないうが。

さて、一体俺はどのように行動すればよいのか?  
取り合えず別に良いぞって言ってみる。  
……これはちょっと保留だな。

お互に何か気があるみたいに思われてしまう。

じゃあそのままだんまりしてるのはどうだ。

……それじゃあ問題を先送りにした事と変わりない。  
つていうかそんな事俺に出来る自信が無い。

とか勝手に考えていた時だつた。

急にわあーっ!と巨大な衝撃波が俺の鼓膜を襲う。

何事かと思い意識を戻すと、クラス一同が俺の方を見ていた。

それはいい！ いや、良くないけどいい！

なんで全員がそんな微笑ましいような顔をして歓声上げてんだよ！

もしかして俺とアリアが『テキてるとか言いたいのか、ここいつ等は。さつき会つたばかりの人間同士が簡単にくつつくか。

常識を考えろ、常識を。

「よ……良かつたな、キンジ！ なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！ 先生！ オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

いや、武藤よ。

分かつたからそんなに俺の手を持つてブンブンと上下に振るな。まるで選挙に当選した代議士の秘書みたいだぞ。今のお前は。それといい加減痛いわ、さつきまで左肩痛めてたんだからな。

こんな奴でも優等生なのだから信じられない。

この武藤剛気という男は憑依前のキンジ君が強襲科にいた頃にだが、よく依頼の現場へと運んでくれたりしている。

おまけに乗り物と名のつくるものならなんでも運転できる特技を持っている。

俺なんかよりも武藤の方がチートな気がしてきたぜ。俺はチートじゃない（？）けどな。

「あらあら。 最近の女子高生は積極的ねえー。 じゃあ武藤くん、神崎さんに席を代わってあげて。 遠山くんもいいわよね？」

「（そこ）で普通俺に振つてくるか（？）（？）」

もはや信じられるような奴はこのクラスにいらないんじゃないのかね？……いかん！ またムスカ大佐風の口調になってしまったぞ！

は！ 待てよ、まだこのクラスには不知火がいるじゃないか。

頼みの綱の不知火の方へ目を向ける。

不知火は……にこつと微笑むと、瞬きでこう返してきた。

『遠山くん、大変だろうけどがんばってね』

助けを求めてわずか三秒で見捨てられたぞオイツー

このクラスで一番信用できる奴に見捨てられたぞ俺！

そこまで俺には運が回ってこないのか！

マジで俺の右手とかに幻想殺とか備ねーでなしじやん！？

「おかえりなさい。お前、今度の「おかえり」は現実は上かーー!!

いい加減こっちはキレそうになつてんだよ！

死にたくないならこれ以上茶化すな。

今度俺の頭の手綱が切れたらこの教室が吹っ飛ぶからなー！

「あ、そうだ。ギルティ、あなたが落としちゃったジジ、これ。

アーネスト海軍少尉は、アーネストの父である。

ああ。無かつたと思つたら体育倉庫に忘れてたのか。

多分倉庫に突っ込んだ時に千切れで吹っ飛んだんだな

あの、アリアさん、一言いですか。

俺  
千切れたベルト渡されても俺嬉しくないんですけど

「いや、分かつてはいるんだよ。  
それが親切心故の行動だつて

「」とは」

俺原作のキンジ君みたいな朴念仁では無いからね。  
ちゃんと人の行為とか恋愛とかその他もうろの感情読み取れるか  
ら。

でもさあ……やっぱ嬉しいもんは嬉しいよ。

賞味期限切れのカツチラーメンとかくれても嬉しいじゃん。  
いや。配られてるところとか見たこと無いんだけどな。  
でも配つてやりたいと思うのはやはり人の性かな。

「理子分かった！ 分かっちゃった！ これ、フラグばっさきに  
立つてるよ！」

俺の隣に座っていた峰理子が、ガタン！ と席を立つた。  
殴つていいですかね？ この頭のおかしい女を。

「うるさいぞバカ理子。 まずは脳外科と神経外科に行つてから学  
校来いよ」

さりげなく本音を混ぜる。

いや、さりげなくではないな。

いやしかしふざけているにも程があるな。

今度機会があればだがその頭力チ割つてやるうか。

「ひどいキーくん！ 理子、どこも悪くないもん！」

「分かつた分かつた。 お前の言いたいことを聞いてから判断する」

「ふー……じゃあ気を取り直して。 キーくん、なぜかベルトをし

ていなし！ そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた！  
これ、謎でしょ謎でしょ…？ でも理子には推理できた！ できち  
やつた！」

「（一体どんな珍回答が飛び出すのか見物だな）」

アリアと同じぐらい背の低い理子は、探偵科ナンバーワンのバカ女  
だ。

俺もそう思うよ。

それになぜか話を聞いているとカチンときちゃうね。

……と、まあ一旦俺の私情やらなんやは置いといてと。  
あくまでそういう噂が流れているだけだがもはや共通認識だ。

その証拠に、武偵高の制服をヒラヒラなフリルだけの服に魔改造  
している。

確かスイート・ロリータとかいうファッショングだ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！  
そして彼女の部屋をベルトを忘れてきた！ つまり2人は 熱  
い熱い、恋愛の真つ最中なんだよ！」

ツーサイドアップに結つたゆるい天然パーマの髪をぴょんぴょんさ  
せながら、理子は自身の思いついたらしきおバカ推理をぶち上げる。  
恋つてお前。

俺の噂知ってるんならそんな事しないことぐらい分かるだろ。  
あんまり余計な嘘ばっかり言うな。

次々と誤解者が出てくる恐れがあるからよ。

とか思った俺の心配は現実の物となる。

いくら高校一年とはいってこにはバカの吹き溜まり、武慎高。

理子が放ったたつた一言の返言。

それに反応して大盛り上がりをかましてくれた。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に！？」

「影の薄いヤツだと思つてたのに！」

「女子どひか他人に興味なさそうなくせに、裏ではそんなことを！？」

「フケツ！」

「（）こいつ等も（）つらで絶対頭おかしいよな……（）」

もはや（）まで来るとため息も出ない。

その可哀わいな頭の中を哀れだと思つてやるしかない。

それにしてお前ら、息があまりにも合ひすぎだろ。

武慎高の生徒は一般科目でのクラス分けとは別に、それぞれの専門科目で部活のように組や学年などを超えて学ぶ。

だから生徒同士の顔見知り率はそれなりには高いんだが……

それでも、こいつ等の息は本当に合ひすぎだ。

あらかじめ用意していました！ みたいなぐらいピッタリだ。

「お前らなあ……」

もつと別の事に力入れるよ。

と言おうと思った俺の言葉は途中で中断された。

なぜか？ 答えはこうだからだ。

す、さ、ゆ、さ、ゆ、ん！

鳴り響いた2連発の銃声が、俺を含めたクラスを一気に凍りつかせたからだ。

拳銃を発砲したアリアの顔がかなり赤くなっている。

余程恥ずかしかつたに違いない。

だからって拳銃は撃たなくとも良かつたような気がするが。

「れ、恋愛だなんて……くつだらない！」

翼のように広げた両腕の先には、左右の壁に1発ずつ穴が開いていた。

チンチンチーン……

拳銃から排出された空薬莢が床に落ちて、静けさをさらに際立たせる。

おバカな推理を見事に吐露していくださった理子は前衛舞踏みたいなポーズで体をよじらせたまま、顔を青くして大人しく着席。

武藤に関してはさつきからぶるぶると震えていた。

……武偵高では、射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』となっている。

つまり、別に必要なればしてもいいということ。

ここに生徒は銃撃戦が日常茶飯事の武偵になろうとこうのだから、日頃から発砲に対する感覚を軍人並みに麻痺させておく必要がある。しかし入学式で発砲したのはアリアぐらいだな。

普通はあんな話は出でこないし、出でても怒鳴るぐらうだと思つ  
が。

「全員覚えておきなさいー。そういうバカなことを言つヤシには……」

それがアリアが武偵高のみんなに発した最初の台詞。  
その台詞は後に俺が時々聞くこととなる言葉でもあった。

「 風穴開けるわよー。」

昼休みになり、俺は一人理科棟の屋上にいた。  
さすがに休み時間中の質問責めはきつすぎる。  
そこで何とか隙を見つけて、ここまで避難してきたという流れ  
だ。

「聞いてくるのもアリア関連の事ばかりだからなあ……」

そもそも俺にアリアの事を聞かれても困る。  
今朝初めて会つてチャリジャックから助けられてそれから少し話した程度。  
個人的な事は何も知らないに等しいのだから。

ため息を交えて少ししゃんぽりをしていると、何人かの女子が屋上  
にやってきた。

声に少しながら聞き覚えがある。

恐らくだが、俺のクラスの、それも強襲科の女子達らしい。取り合えず見つかっては面倒なので、俺は物陰に隠れる。だがこいつやってくるとビックの犯罪者Aみたいだな。

「さつき教務科から出てた周知メールさ、2年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれってキンジの口じしゃない？」

「あ。 あたしもそれ思った。 始業式出てなかつたもんね」

「うわ。 今日のキンジって不幸。 チヤリ爆破されて、しかもアリア？」

「1・2・3と並んで金網の脇に座つた女子たちは、俺の事を話題にしていた。

それについても本当に気に食わない内容ばかり話すな。そう思い、俺は苦虫を大量に噛み潰したような顔をして静かに身を潜める。

「さつきのキンジ、ちょっとカワイイソーだつたねー」

「だつたねー。 アリア、朝からキンジのこと探つて回つてたし

「あ。 あたしもアリアにいきなり聞かれた。 キンジってどんな武僧なのとか、実績とか。『昔は強襲科です』」かつたんだけどねー』つて、適当に答えといたけど

「アリア、さつきは教務科の前にいたよ。 さつとキンジの資料漁つてゐるんだよ」

「うつわー。ガチでラブなんだ」

会話を盗み聞きしていた俺はますます気分が悪くなつた。  
人が知らない所でこそそと陰口をたたく。  
「うついた女子はかなり好かないな。

「キンジがカワイソー。女嫌いなのに、よりによつてアリアだもんねえ。アリアってさ、ヨーロッパ育ちなんか知らないけど空氣読めてないよねー」

「でもでも、アリアって、なにげに男子の間では人気あるみたいだよ?」

「あー そうそう。3学期に転校してきてすぐファンクラブとかできたんだって。写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるみたい」

「それ知ってる。フィギュアスケートとかチアリー・ティングの授業のポラ写真なんか、万単位の値段だつてさ。あと新体操の写真も」  
何だそのふざけているとしか思えない授業は。  
本当に大丈夫なのか、この高校は。  
しかしそれを差し引いても言いすぎじゃないのか、こいつ等。  
いい加減にしないとキレるぞ、俺が。

「ていうかあの子を、トモダチいないよね。ショッちゅう休んでるし」

「お皿も一人でお弁当食べてたよ。教室の隅っこでぼつーんつて」

「うわっ、なんかキモぉーー！」

「（こい加減にしゃがれよ、こいつ等……）」

わいわいと人の陰口を言いながら盛り上がる女子。

それに対し聞いていた俺は怒りを覚えたが、同時に気分も沈む。

こんな話されたら普通は気分も沈むってものだ。

しかし、アリアも俺と同じで悪目立ちしているんだな。

これは少し話し合ってみる必要がありそうだ。

## 第7話 僕がアリアの奴隸？ なんでそうなる？

俺こと遠山キンジは現在、装備科棟の中にいる。

ここは武僧に必要な武器や銃弾を売つてくれたり作つたりしてくれたりしてくる。

品質も中々の物で憑依前のキンジ君もまあまあ来ていたり。つといかんいかん。

ついついここに来た理由と別の事を考えてしまつていた。

まあ来た理由は簡単。

俺が昨日頼んでおいた物が出来上がつたので取りに来たのだ。値段はそこそこ高いが今回もまたいい品質との事。

あの人はそういうことに関しての嘘は絶対に言わないので安心だ。

そのまま廊下を進んでいくと、一つの部屋に田がとまる。

『ひらがあや』と平仮名で書かれた表札のついたB201作業室。こここの部屋の番人に、俺は呼ばれたのだ。

番人つて体型では全然無いんだがな。 ハハハ。

「平賀さん。 遠山だ、開けてくれ」

「開いてるから入つてきてほしいのだー！」

中からは子供のような幼い声が聞こえてきた。どうやらこのまま入つてもいいらしいな。

「了解了解。 それじゃあ遠慮なく入ろっぜ」

誰もいないのだが一応確認を取つておく。

この光景を見た奴なら間違いなく変人とか思いそうだな。  
別に思われてもボコれば問題解決な訳だが。

扉を開けて平賀さんの部屋に入るが……「おおおお。  
も、物で辺りがかなり埋まっちゃってるんだが。  
足元よりも物の埋もれてる面積の方が広いって感じだ。  
片付けろや、ここまできちゃつたらさすがに。

と思いながらも俺は下の方にいつていた目線を前へ。  
すると平賀さんとばっちり目があつた。

……なんでちよつとしたワインクをしたんだ？

俺は口リコン王じやないからそんな手には引っ掛からないぞ？

「平賀さん、注文しておいた品なんだが

「もうひらけた出来てるのだー！」

「早速だが見せてもらひつてもオーケーかい？」

「もうひらけたですのだー！」

そつ言うと物がいっぱいになつてゐる道具棚をあさり始めたぞ。  
……改めて見て思つたんだが……小さいな、背が。  
今胸とか思つた奴、それも正解だが取り合えず頭爆破しき。

「や、やつと届いたのだー！」

よつやくのことで注文の品を取りだせたりじい。  
平賀さんは汗を搔いていて、息も少し乱れてい。

だからやつと片付けたほうがいいのでは？ と言つたのこ

……いや、別にそんなことは言つてなかつたな。  
心の中で思つただけだつたよな、俺は。

「でも遠山くん」

「ん？ なんだ、平賀さん」

「なんで急にこんな物を注文したのだ？」

「あ……得意な武器なんだよ、コレ」

平賀さんが持つてきてくれた一本の刀を指しながら苦笑い。  
平賀さんは尚も分からぬといつよつに首を傾げた。

その姿の面白いのなん。

まあでも、一番面白いのはそんな質問をされるような武器を頼んだ  
俺だがな。

俺が平賀さんに注文したのは、特殊仕様の逆刃刀。

逆刃刀は武僧なら絶対に知つてはいるが、かなりマイナーな武器で  
もある。

一体なぜか？

それは、使用する者の数がほほんに等しいからだ。

逆刃刀とは本来刃がある部分に峰があり、峰がある部分に刃がある  
刀の事。

主にこの1点しか普通の刀とは違わないのになぜ使われないのか？  
理由は簡単。 逆刃刀は斬ることができないが故に使用されていな  
い。

刃の部分が峰ということはイコール物が斬れないと同義。

無論逆に返せば斬れるが、それなら逆刃刀は必要なくなる。  
だから使用されないので、逆刃刀は。

「???? ますます分からなくなってきたのだ。遠山くんが刀を使えるなんて、見たことも聞いたことも無かったのだ」

「そりゃ今まで隠してたしな。俺が剣術やつてたって

「なぬ！ それは初耳なのだ！」

「いや…………だから隠してたんだから知らなくて当たり前、普通だつて」

「それもそうなのだ！ やつぱり遠山くんは頭が良いのだ！」

「（…………うん、もう突っ込んだらキリが無くなるから止めた）」

あえて聞こえていらない振りをしてやる。

でもこういう優しさって気付かれたら気付かれたで面倒なんだよな。  
人間つて憐みの目とか向けられたら大半がキレるし。

……ああ、俺もキレる側だな。どっかかっていえば。

「あ、それとちやんと言った通りには出来たのか？」

「もちろん！ バツチリですのだ！」

「そりゃかい…………ちなみにこの逆刃刀のお値段の程は？」

「うーん、逆刃刀だから値段は安いから……四万円ちょっとなのだ」

「お、意外と安い。八万円ぐらいだと踏んでいたんだが」

取り合えず先に四万円を支払つておく。

しかしあまり金に余裕が無いのもまた事実なんだよなあ。  
何かいい依頼でも受けて金を貰わないとやつていけん。  
人間、一番では無いにしろ金は必要だしな。

「そんで、俺の本命は」

「え～と……『めんなさ』なのだ!」

「まだ出来でないのか？ 火炎瓶の方は？」

「どうしても遠山くんが注文した仕様になると難しいのだ」

ちよつとしょんぼりしてしまつ平賀さん。

別に逆刃刀出来たんだから今度でもいいんだけど。  
どうせ滅竜魔法の使いどきなんて限られてるし。

あくまで頼んだのも念のためつて意味合ひが強いからだつたし。

「じゃあまた今度でいいよ。 今田がどうもありがとやん」

一言一言だけ呴いてその場を後にすることに。

あんまり言い過ぎても良いことなんかないしな。

それに……部屋が散らかりすぎてるのも計算してるんだらつ。  
だったら他言無用つてやつだらつ。

平賀さんのす「」れを改めて垣間見たような気がする俺だった。

「ただいまー」

俺の部屋には自分一人しかいないのだが、そこは習慣といつやつ。  
まあ何はともあれ、自分の部屋に戻ってきた俺は荷物をソファーに置く。

そしてようやく一息をつくのだった。

もう夕方になつており空も夕焼け色に輝いている。

正直な話、もつと早く帰つてこれた……はずだった。

だがここでも俺の運の悪さが発動。

クラスの面倒くさい連中に捕まつてしまいそのまま話していたのだ。  
主に教室でHZOやつたり遊戯王やつたりゲームやつたり。  
なんだかんだ言いつつも俺ははまつてしまい、そのままずっと話しながらダラダラと遊んでいたらすっかりこんな時間になつてしまつた。

今回は運の悪さと自業自得が両方発動したな。

自業自得が発動するつて言うのかどうかは別の話として。

「それにしても、本当に広いなあ」

この部屋は憑依前のキンジ君が今年の一月に暮らし始めたみたいだ。  
ここは本来四人部屋らしいが、キンジ君が転科した事と、たまたま相部屋になる探偵科の男子がいなかつたことが重なり一人で贅沢に使つてている。

まあキンジ君にとつては幸福だろうね。

彼は武僧高を良く思つていい上に平穏が好きだから。

でもさすがに行きすまほひどいとも思つ。

「（しつかし、本当に静かだな）」

俺が動かなければ音などあまり聞こえはしない。

こういった静かな一時は憑依前だつたら一日三時間ぐらいは欲しかつた。

まあ今こうやつてこの世界に来てるんだからもう元の世界には行けない。

……俺の妹や弟は元気でやつているんだろうか。

今となつてはそれだけが唯一の心残りかもしれないな。

しかし、あのチャリジヤックは本当に気に入らない。

あの件に関しては俺が拾つたセグウェイの残骸を鑑識科が今日からさつそく分析しており、今俺が所属している探偵科でも調査を始めている。

『武偵殺し』の模倣犯……恐らくは爆弾魔とかいうヤツだな。

爆弾魔とは、この世で最も卑劣な犯罪者の一種で、大抵ターゲットを選ばない。

無差別に爆破を起こして人々の注目を集め。

そこから世間に自分の要求をぶつけるのが一般的とされている。

正直な話、俺はそんな奴らは許せない。

自分の目的のためだけに関係の無い人達を平気で巻き込む。

これを卑劣と言わずになんと言つのだろうか。

聞く奴によつて考え方も思う事も信じるものも違うから、俺の言つてゐる事は單なる偽善者の吐く妄言とも思われるかもしれない。それでも俺は許せない、何があつとも絶対に。

ピンポーン。

そこまで考えていた思考は急に中断された。

誰かが俺に用があつて来たらしくな。

あまり気分は優れないが……居留守を使うのは不味いな。

相手を怒らせるかもしないし出てみるか。

俺はゆっくりと다가ドアの方へと歩み寄る。

ドアノブを回し、これまたゆっくりとドアを開けた。

「はいはい。遠山キンジだけど、一体どちらなんですか？」

「あ、キンジ」

「？ アリアじゃないか。どうしたんだ？」

俺のところにも珍しい来客が来たものだ。

まさか会つて一日も経つていない女子生徒が来たんだからな。

憑依前のキンジ君ならしく日常的にあつてそつだ。

周りの評価ではやたらと女性を落とすことが上手いと評判だし。

「取り合えず入つたら？ 外はまづいだろ」

「お、お邪魔します……」

何や？アリアは緊張しているように見えるが。

……もしかして男とあまり接したことが無いのか？

現在進行形のキンジ君（俺）同様に。

まあアリアと俺はそのまま部屋へ入る。

アリアの方はトイレを見つけると小走りで入った。  
見てて妹みたいに感じてしまうのはなぜだろ？  
仕草が似ているからかな、俺が出した答えでは。

だがまずは玄関に置かれっぱなしのトランクを運ぶ方が先か。  
つていうか、これ明らかにブランド品だし。  
傷つけないように運ばないとな。

「んー……にしても、なぜにトランク？ 今日泊つていいく気なのか？」

一旦スペースのあつた場所にトランクを置く。  
しかし……ここは男子寮、あまり関心はしないな。  
まあ本人がしたいつて言うんなら止める気はないけど。  
そこに白雪が来てあつという間に修羅場に変貌。  
ははは……実際にありそうで上手く笑えないぞ。

「キンジって、ここに一人だけ？」

「ああ。 入る予定の奴が一人もいなかつたからな」

トイレから出てきて手を洗つたアリアは部屋の様子を窺つている。  
別に思春期男子が持つている本なんて一冊もないぞ。  
もちろん思春期男子が好きそうなゲームやDVDもだ。  
憑依前のキンジ君と憑依後の俺。  
どちらもそういうた物には全然興味関心が無いから。

「それで今日はどういった要件だ？」

「え、えつと……左肩は大丈夫なの？」

「あ～あれ。 何か知らない内に泊つてたから心配ない」

「そ、 そう。 良かつたわ」

「ふー……と安堵の息をはくアリア。

朝にも言つたけど罪悪感なんて感じじる」と無ごの。悪いのは受け身を取り損ねてしまつた俺なんだ。やつぱり強襲科に戻つて訓練するべきかね。

「でもそれだけじゃないだろ? ここに来た理由」

間をあまり開けずに尋ねる。

アリアには悪いけど、今日の夕食も作らなければならぬ。短縮が可能な時間はなるべく短縮。

今も昔も変わらない、俺の中の決まり」との一つだ。

「へ、 うん…… キンジ」

「なんだ?」

ぐるり。 。

その身体を夕陽に染め、アリアは俺を真っ直ぐに見てくる。長いツインテールが、優美な曲線を描いてその動きを追つ。

「 キンジ。 あんた、 あたしのドレイになつなさい。」

俺の思考が硬直したのは、言つまでも無いだろ?。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2844y/>

【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ！】

2011年11月20日11時23分発行